小精廬雜藏

大震餘錄

八

大正十二年八月中澣起筆

特別
14
1919
356

176624

精廬雜載

大正十二年八月十一日起筆

東京市牛込区市嶋謙吉
東京軒町三十

○昔日を過ぎ坊写と山海美成の賀春禧單一冊を獲たり、之を毎年春初の年賀に配つたり、ものを編し一冊とせんとの企画なり、文化文政の文人の習慣なる新年の名刺代りに思ひ〳〵の句を印刷して配つたるものなり、谷文晁うの古書を模して家のいつのべうの冊子を毎年配布し、後に編して本朝書畫家とせんとの企画なりしが、此の美成の賀單も亦その一類たるべし、美成を考証家にうて、自ら新

38- 9145

年の因人に珍奇のものを配つに、開基天一の唐時賀
春禮筆一う載せてある寶（寶と拓は）の合字と我
邦の寶船と似たものである、其次う豊前宇佐神宮
の巻する唐照宗の天復の頃作ある古鏡の拓本
その次うに南部唐、うんめと書き）見るものらしく
大きさとて数面と重うてある、其次に唐の南海の子
生るする不の轉輪八花鉤枝鑑銘、其次の斗星
図、其次う大平通載の断簡、相阿彌筆の
米俵を湯載せる節分船図、太閤の紋のある
る永樂通寶銭等すうて皆るるるめくう漢文
の考證目を附し文政七年ちもくの初めう天保初
年迄の及人である、日美濃版で帖子製本である

る、今も稀覯のものである、見賀軍の標本とす
ることとう申まる　八月十一日記

○市河三陽氏墨海の内に大宝雲右衛
の手形を収む、北人紙本の上に相撲のあるを不こ
珍味あり、海石巖山北人の等身大の図を出うる
ことあり、これを曲亭馬琴うに人と図宮ども自ら
上欄に注しに霞堂は早大図書館に蔵しあり、岩
山の出きたるを一面年前美濃に出てるを一尺七
寸、稜う状蓋一面の泥文あり、拓を取り、面も
すきこのものとも奪うもおしとこの収めの
八月十一日記

公門拜
別以恩
霞隔虎
嘉祐時
玉鑑空
向義彩
留手跡
益支拜
玉五筆
吳玉山

[illegible]

○雑感「住宅」と書商論を出すことになって余の
演説を徴し来る、書商の挨拶なるもの格別の
工夫もなきものから、書商の使命余程に就てもっとも深く考
へられたことも多く、社家の書商説の統説なると読
詰の大要を閑文字に書きつく

一　書商と住宅の要部である、

書商と住宅の要部たるべきは、ちょうど言葉
を書商を如何なる家とする人、例へば著者家の
校正業に親しむ人、の一日も長く居る
所は書室である、随分夜深くまでする不
ひまある、随て其の構造（挨拶）は便利を生来て居

らねばならぬ、健康に適する校舎なるべ
き筈に合うようなるものなれども、更らに委し
く言へば、清閑であるべき、遠く塵俗風
塵の無んかるべき、例へば心宅外に庭つきとえ
うの無んかるべき、樹を植る日当
りの数ひある、日本は岩を近く吐出
大切なるべきを全力をこめて集注するか
ゆえに霊勢を衛ふのである、西洋人を自分
の常住坐臥の家即ち書商に入れ書きを置
く、必竟客を近く所為
また、のるべく、健康に影響する校舎ること
う無いこと、えんを第二位に置く譯である

又日本の茶室の工夫を凝らして[illegible]国技
重きを置く人もあるが、さして此の茶室をも
高く売る人もあるけれども、およそ茶室不
と常住坐臥のごとくして不可([illegible])なる所([illegible])不他(原
ちがうとい、茶室の構造(陰気[illegible])
形式の定まれるもみな陰気の心のない室
ち作法もまたみな機会の譯に書家の
ばかりでなく茶室ばかりも大切な要部と
ト云ひ伝へ[illegible]

二　書家と茶味に於て秘奥の点

書道とは[illegible]

書家は、時を惜むべきこの主義にて
来客を節分をもこともある、節分を老
つても切の如き[illegible]び[illegible]多くの
人を未定稿の心を人に見せることを[illegible]又
書道の種本をもを秘する人もある、書家
茶等の意味に於て秘奥の点
人の書家の客をもしき入れ、([illegible]意の支人
ものを例外とし)陰に秘奥の点あること
自己秘奥のこと、家族の点
ものを秘奥とも云へぬが、他人[illegible]
り用のないものもある、[illegible]人の[illegible]
ると秘奥と属することもある、又他人に見せる

ことを惜る書籍とこの日誌とこの家用帳の類
は自ら書籍の置場のうち、活動家なれば事業
の計畫書や秘密会に附するを要する時の
家人なりも示すを惜る様なるものこの置場
なり、若しこれ書籍を絶滅に家人と雖も
入ることを禁じ人もいくらもある、一つは書
類等の紛亂を恐れこれあるが、他見を
厭ふものあることもこの原因をなすものなる

三　書籍を或る主味を於て家の寶庫とする

特別な倉庫や書庫をもつ有する中豪の家
八別として善者の家や渡世家や著述家や

文人が圖書を蒐集し所の書籍である、長く苦
辛して蒐集し此材料や自家の未刊著述や
先人の遺稿や師友の著述や金を以て購ひ
難い大切な文書や愛玩の圖書を多く
列べる為ここに書庫がある、圖書館ともいひ
書画や文房器や種々の標本何よ
り第一の置場ことも書籍行りんとする手
近な置場なり之れを家しまん為め――約束
散佚を防ぐ為めこの置場を設ける
日の便利を図る為めこの置場のうち倒と
なるなる、北斗の駄うすること書籍を主の
人の愛玩品の為もすることもあり、兎もすること

人の最も大切な財産がここに蔵せられ、即ち宝庫と云ふべきである

四　書画と趣味の修養

出家を或る意味に於て仕事師である著述家の工場と云ふべきものである、併し物質上の仕事師である丈に、その物質を慰めるものは、どんな無趣味の人でも、何かうつくしい美しいものを置く位のことはあるが、花瓶を置き盆栽を置く位のことでは、一向物足らぬ。

しゝ趣味ある人は、書画の類をこゝに掛ける、文房四宝を陳列する、新らしい趣味家は油絵や彫像を置く、古い趣味家は掌を撫でつゝ茶を飲む

茶を聴くこともあり、俗人の聞けば側へ寄ることも出来ぬ浄瑠璃や長唄の本を置き三味線の一張位をそこらへ横つてある、趣味の種類や程度を見ると、なかなか多くの人と違つて相違うある

見ると、こゝに多くの書画を這入つて見ると、なかなか面白いものである、其の主人の趣味の程も窺ふに足る、自分の書画を見ると面白味を感ずる所のものは、例へば海の色、海の色を見ること、何こゝに何まで世間無数にあるかを思ふ、あつてこゝの日人の趣味如何であるかを、松浦武四郎の古材を勧進して此の上一畳敷の茶室の南蛮文庫の境内にあるが、こゝに又こゝ

何ぞ何ぞ大時代の骨董趣味を張つてゐる

五　書籍は思想の策源地なり

書籍を閑居静思の副伴とする人間は不幸なるかと云ふに決して然らずいこゝを考へ出すもよいことを考へ出すのも此書籍なり、昔し某氏と云ふ支那のようなる、学者が平日引込み考へることを為さず国民を虐げる政治を行つたと云つて、志ういう方なる人と天下国家を益する大思想をこゝから生ん[illegible]、政治家文学者等が震天動地の業をなすのも皆書籍なり、一家中の大

[illegible]策源地をこゝにあつて、その室内なりと雖も徒に天下国家に繋り更に進んで世界に繋ることなる、書籍を人間に喩へると云へば肥料である、世界の活動者元気人の書籍を保護して永世に伝ふるの北斗である、日本も昔丈山の詩仙堂、頼山陽の山紫水明の家、伊藤仁斎の古義堂保護し来たれる保護なり、と云ふ計画なる大限光侯の古籍を早稲田大学に於ても大切に思ふのも此故である

六　書籍の播殖に就て

書籍の上叙の如き重大なる意味あるとすると

こんこう構造の二風なるものおのづから念入らざるべからざるべし、前述の如く日本の習慣として日々必ず用ひらるる本堂あり、主力を注き居る表の要部を以て表ひつくすことときも宜しく考ひうるべきなり、常住は別の書斎の主張に特う悪うる構造こそ不便なりとすべきも神上なる内殿上なる問題断るべく宜を異て終に疾患を招き換ることなきもなる、但し必ずしも内を仏るべきやの問題ハきっと面倒なことなれど、遠来なる親戚のなる人ひも書斎とならしめ自分の流なる、自分なる庵内の利害のあるこの為の遠ひ比家なる住ひ

ずくひと云ふを例とする、浅ましきの個性なれど心関係ある書斎なるなる指ハ、銘々の流儀や趣味や嗜好なるなるカラムかくなるよく二風しても、また他人なる別住なる新意を受けるといふを困難のなひなる併し大体必要條件をこれ（ハ）先づ住ひ居家内の清閑の部を選ひ住ひ、や、奥まる所にて京都の未客の静なる直く耳を入る様な端近きなる地位ひなる、日当なる面する地位を占めひい、庭園の要部の面する地位を占めひい隠居所日換なる盛べく邪魔なるる無本住ひ居家の片隅なる建てるなる書斎を

年狩と日視するものもあり、こんなのも洒落つ世ゝこと
もなり、
建築の仕様も貧富相応なるより地位なるより一概
にどうとも云ひがたい、併し自分ならば可成二
室を欲する、一室を洋風一室を和風とし
洋室を廣くし和室をせまくし、両室の間を
取ケ放しで襖等を設ける、部屋を南を後
ケ東の方を取いて置く様にしたい、その為め
和室も東室のうしろに、人の多く書斎の為
暗らいのを好むものあり、多くの輝くのを欲す
るものあり、若し家の性癖を東西甚だ異々
なるあり、之合の文像を云う又文合風なり

のような様子まことに肝要で、室内の採暗を
定幕で調節する様にしたい、素半を窓を
可成大きくし庭園の見える様にあり
たい、書架を窓の無い方面に壁の中に作り
つけにして和洋の図書を可成多く置し得
る様にしたい、暖炉は洋室に据付ける、これも
壁のを窓にして此り付ける、煙上はいくつか
の棚も文物を置き込む様にして作りたい
えゝ一骨董もいろ〳〵の文具や標本など
の類を置く様にしたい、机は和洋共可成大
形のものを用ゆる、（文具を置
くにも之を補法で作る、）冊を置けるだけ多くの原稿を

掛くるも）こやレ又、又てくんのよの机も実際不便
である、広高の面積に割合に大きさこうるき
る位な机う便利であることを特に主張する、此の
洋机のあるうるる）高の広架を要する、此の
を為ちう云ふ常用の広あ手の傍く
面のあるを抜くるの、書北斗等を光るまし大
なるを要せず、椅子を極めて低くうんことを
要する、即ち高くくるを度合を適するものなる
る、あ来椅子を無論要る、棚高を拍の納まる
抜る抽子つき洋風のタンスも要ることを要
るハメコミとして大切なる高さを入れ
得る抜りて書書棚なども花し得る抜出

来れハ大変便利である、小卓子を置き二三の椅
子を添く東客の用る供しておよそ此等
ハ皆な洋室の高る置くの便利ひあるか洋
室の坪数を比較的大ならざるを得ぬ
日本室ハサツのハリとしたるい、宴ぎ
ハ大なる机をつくるの茶棚を置き日本風の
排拍をもち出ることなきい、西洋室に使
めば、ここに移る用る供しない
ここに注文の一つあるのを寝室の高る連
絡しあることを要する一靴ひある、深更
睡眠を催ちは直ち寝所に入るとの
夢中何の来出しなことを直ち法者

の拓するも寝室の陳列するのが便利ひめ
る、西洋書斎の型を模し、戸を設け、書棚を
設けるごとくこのうち、公齋を附随し厠を
手洗所なども設け給ふべきなり

大正十二年八月十二日

○八月十三日修養者を到る汽車中五時間ばかりを
時間を要帯の一書を熟読して無聊を慰る、
也伊東忠太博士の「余の漫画帳」と云ふ題の印
刷漫画の随筆であつた、各地の風俗を味ひ
ゆゝ面白くおもしろく感ずることもある、閑の任
うせて例のごとく文を書きつゝ、

一日本でも食物を箸で指で取る
のを野蛮だとなして車しめるの、印度でも
高等の社会でも手づかみを為ふ
野蛮の故の思ひ、家の現実があ
る、味も又匂いも美感を覚ゆる
だろうのだ、鋼覚ゆ美感を助け
るといふ事実なれども道理ひある、
一日本人を厠に入る毎に必ず手を洗ふと
ゆをつて潔癖とみるが印
度人や日本人の潔癖を視めて、と云ふ論
も彼等を便う論なれども局部を左手
をつて肛門を洗ひ清めること、必ず

役夫に至る日本人の役人奴隷の辱を有してゐる

一支那人は銭湯に入浴する習慣あり日本人も大勢入浴するが、彼等は日本人と異い日本人もまた彼の浴場の家屋に入る支那人は頗る彼の長いことを恐れ、彼を拂はずして入る

一支那の旅行者は一文も使はずに一文も無くなることがあり、見る人々の為に笑を買ふ

支那の文化を入れたが北の意味を解りかねる

支那の普通の貨車乗車賃の軌幅が一定してゐる、所謂「光の軌」と云ふ成程の所以である

を往来するが路面に深い溝を掘り、車輪の軌を穿つので、車輪は是れもこの軌に由りけんが進み得ない、前車の軌を後車の成程のある所以なり、抑て一旦豪雨の降る北の

他省の新聞を入手の寄で一刻位も割引する

新聞を通過する内ありて一文も使はずに

八無くなる仕舞ふ

一軌鐵道は支那の文化を入れたが北の意味を解りかねる

支那の普通の貨車乗車賃の軌幅が一定してゐる、所謂「光の軌」と云ふ成程の所以である

を往来するが路面に深い溝を掘り、車輪の軌を穿つので、車輪は是れもこの軌に由りけんが進み得ない、前車の軌を後車の成程のある所以なり、抑て一旦豪雨の降る北の

輙ち小河を変じ、田や池や河の水も涯を溢れて流れ込むこと、魚田減水の時、輙ち小河に入りて自ら身を拓き、到頭逃げ路を失つて終に死するものを、輙魚目の苦境に陥るのである

一 支那の長江の筏の巨大なるものとなると、長サ百間、幅三十間、面積約三千坪、材木二万本、重量約一萬尺ノ と称し、廣東省あたりでコンナ筏を見ることが往々あるといふ

一 北京あたりで往々黄河の粉末を降らすことあり、その時は日中ひも暮色の如き黄色を呈し為に

帰て時々泥を降らす、物を敬するあまりて怪しく吹くる、北の黄河を黄色を帯るく湯地を黄色をなする、時々驟雨の伴ふこともある、これは北海れ物の霧である、黄砂方面の到風に黄河を高く中空に吹きあげる塵埃のうち地球の回転のなるを見るもの、ある、北の霧と称する支那固有のものである

一 世界第一の大石材として伊太利士の挙げてみるものを紀利亜のレバノン山とアンチレバノン山の間の盆地スバアルベックとする小亜細亜の遺跡のある、羅馬帝国時代の寺院の遺跡である、約九千二百坪の大建築で、柱の直径七尺

二十五尺高さ六十五尺、驚くべきい後の使うてある
砂岩石の角柱で其高さ六十四尺
で十三尺角になるから其容積を一番八百
十二立方尺で、こんな世界第一の大石柱で
あると云ふ事である

一 世界第一の美建築は印度のアグラ市にある、即
ちタージ、マハールである、タージは莫
臥兒帝王第三代のシャージハン帝の最愛の
妃アルジュマンド、バヌの死を哀悼の為り金
を惜しまず造った墳墓で、西紀千六百三十年に
工を起し十七年を経て後ニ年になり、全部純
白雪の大理石を以て築き、あらゆる寶石を鏤

入して装飾した工費は帝の手紙によれば石工
丈で千万の金で三千万ルーピーとある、今日
之れを以て金十万人が約三億円で一坪当り
くらい三十五銭用いたとする世界第一の寶
價な建築だが同時に世界第一の美建築
である、日本の日光廟なども時價に引直して
一坪平均四三銭五千円位なるべきか

一 廬山の麓に今も外國人の別荘こうした
の結牛嶺の頂の如きも全く外人の別荘地と
なって街路の名称家屋の様式皆洋風で
あるといふ

一 孟子精舎は昔し中印度 楕羅羅國の領

達長者が釋尊を請ずるために王子祇陀の園を買って建立した精舎で、國都舍衛城の南郎の西面きの立つてゐるが、今も荒廢して何物も遺つてゐないが、世尊祇園精舎の圖として傳つてゐるものは、無憂の園の名のある徳川家光が寺の道路島野道を天皇へ渡したもの精舎の見取圖を此らもとあるを見て、これを佛教印度支那のボチヤ國の舊都アンコル城の南郎を西面して建てられたアンコル、ワットと云大伽藍の圖であることのやうに、

一支那の三山の一つである峨眉山は四川省成都の西南峨眉縣の平野を突兀として一峯の連峯をなしてゐるその第一峯大峨四山は標高一萬一千四百尺第二峯以下は二峨山三蛾山四峨山と順次なるに高さを減ずるも、大峨山は東南面のみして削るが如き絶壁で、一塊の成る絶頂から四千五百尺も垂直なる切つて落した如く成る所を、神仏投身所、咨の詞う無い とゝ云てゐる

一印度支那及印度の佛教藝術へ支那の影響を受けて、ある別世界を形成してゐる、これを印度の衍譜る羅喉羅、略称喉羅と云ふまで用ひ

名ゴ狸ヒ名ル、日僧をこんで祀ることの迷信のあるを、
北の喉羅い鬼のごとき恐るべしの下顎の無い顔斗
りの者が明治十年迄ありしが、踊食の偽祝を因
しく無いう貪り吟ふ人なるアゴが缺けしと
云ひあて、形顔ル自吟ふと云ふ不ル甚だ似て
みる所ある人と、蕎術上あるの間る何等
この変為があるものなるべし

一　牛窓の武蔵の社寺の相手なるみる鳥天
狗ヶ佛殿の二十八部衆の中なる迦羅王といふ
人身鳥嘴の怪物一つのうれしあり、こんなる印度の所なる
神話上の巨鳥ヒ、或る天殊の化身ヒも云ひ、其の
翼を広んへ有る翼お鄰距ること三百三十六方

里ひろ云ふ、印度の神話ニ日本のお伽噺ニ
取入れられたるものなり

修善寺の旅館ニ汗を拭いて
却説すれば但し簡潔を旨とする
色々くハ原文ニ掲ぐ　八月十四日記
雲を摘み出す

○修善寺ニ来たのは前と二回あり、夏時来るハ
ちょうの昨年ありしが前ニ来たのを大正以前と
思ふ、温泉と静寂なる処ヘ出来の唐ニ立寄つ
たことと一回、その後ニ一人ヒ来た様ニ記憶するが、
村上君ニ恰ち合わせて体育法ニ

れを白隠の遺法び村上翁の日常行住の法こ）の教を
受けたことゞうあるゝ二個とも
も獨鈍の靈のあの真向のある淺羽揚とうある
有したこれも才二流の說合び都尾う充分ひ
く前の漢俗を面しとて家もこの一つもいてをゝ二
家也部屋を拾へて見たが思ひ〳〵無いの閑
口したゝ全体修義者を頼根の如き涼しい所ひる
い春秋を来るべくして夏ハ来るべきひるゝ去し
温泉修義合う張つもの所と無味う無ひ
ゝ十数年前を比較すること地獄極楽化
したゝ此前を来比陽を拾を家をもを式斬
も無つたが、ゝを旅館附の高座を茅根の湯

本ゝを優ゝを多く出来て夜中ゝをもゝを
無果しもあるゝ今日泊つ四ゝ浅羽揚う泊ゝ
函四宇閣とゝあゝを能無ゝをもも出来てゐる保
ここを来ていつもゝをゝ氣分のゝいのを夜中桂
川ゝ泊めて散策すること晩面の拓を拳げる
ゝを修禪寺の打ゝを梵鐘をゝくことゝある
無聊を慰ゝん料ゝも拓ゝを家を漁つたゝ幸を
（高本橋屋の修善寺拓ゝを持ゝを長つてあつたゝ
煽あて陳ゝて見たゝこれを左国次ゝ数国演ゝた
ゝあたゝう陳ゝて見ゝを今ゝ始めゝ、その土地
の因人たゝこのゝをの土地び陳めは何のとゝく拓
味のある拓のゝも思のゝたゝ、此拓陳の一部を教家

の最後を語つたものである夜叉王と云ふ面目作者と其長世桂を頼家と點綴した所の思構である、修善寺で頼家の面を彫してあるのを思ひ付いた脚色であらう、近刊の東海記にも二の事を物す

一、来宮ハ指月殿又ハ經堂と唱く塔峯の山腹、指月殿ハ頼家の墓所なる源頼家公の墓所なり堂の中央なる丈六の釋迦如来を置く尼公四十二世將軍の冥福を祈らんが為め建立する所なり宋版の大般若經を尼公自ら書給ふ大將軍大金吾督源頼家菩提尼置之と認めの手也なるもの是なり此經も其内に入りたれど芝の増上寺

へ帰す

尾洞ハ塔峯の禁忌あり民家の背後なる林の小徑を攀ち上ること数十歩石垣を刻りて敷きたる廣長の如き小室の地を二尺五寸ばかり一有餘の高さある大十九基の古墳墓なりて並ぶ徒前ハ十三あるべしと而して十三家の称あるは何れも寶篋印塔の古式を據んだる石層塔なりて指月丘に於ける源頼朝の墓標と異同形にして土俗傳へて禪閑尼雖も猶也從士の死屍を葬めたる旧址なりと且つ古来此地を御洞尾と呼べるハ公が此地に御閉蟄なりしの日、起臥栖居の假室を置かれし伝説なれバ今右南北の数所を存す

を誘つたものである夜叉王と云ふ面目作者
の世相を頼家と點綴した所の心者の思構
修善寺と頼家の面影を髣髴してあるのを思
ふ比脚色もあらう、近刊の著書記念二の
物語

未だ八指月殿又八經堂と唱へる塔峯の山腹、指
月殿なる源頼家公の墓所なり堂の中央な
六の釋迦如来を置き尼公四郎二世將軍の實
を祈らんが為め建立する所なりと宋版の大般若
を巻もと云ふ、其巻尾に為紀伊大將母尼金
吾督源頼家菩提所置之と記るの手也なるもの
なる也此塔を基点として向上の右に芝の増上寺

御に帰す

尾洞八塔峯の禁域にあり民家の背後なる林
の小径を攀ち上ること数十歩石垣土を刳り
築きたる廣袤の如き小室の地を二尺五六寸ばかり一
人有餘の高さなる大小九基の古墳墓なりと其
立ち一位前の十三あり、而して十三家の称あり何れ
も寶篋印塔の古式を擬へる石層塔にして指月丘
に於ける源頼朝の墓標と異同形にして土俗傳へて
禪閑尼(雑説に曰し)従士の死屍を葬めし旧址な
りと且つ古来此地を御洞尾と呼へるハ公が此地
に幽閉せらるゝの日、起臥栖居の假室を置
かんし修善寺旧址なるハ今尚南北の数移を存す

を語つたものである夜叉王と云ふ面目作者
の世相を頼家と點綴した所の心者の思構
修善寺の頼家の面うを見してあるのを思
ふに脚色もあらう。近刊の事蹟記をも二の
物す
来世ハ指月殿又ハ經堂と唱く塔峯の山腹指
月ヶ宮なる源頼家公の墓所なり堂の中央な
六の釋迦如来を置く尼公四郎二世將軍の冥
福を祈らんが為め建立するものにして宋版の大般若
經を卷尾に著經者大將軍左金
吾督源頼家菩提尼置之と記るの手也なるもの
なる也此經を其内に入れられ芝の増上寺

の御に帰す
一御尾洞ハ塔峯の禁にあり民家の背後なる林
中の小徑を攀ち上ること数十歩石面を刻して
築きたる庫裏の如き小室の地を二尺五六寸ばかり一
尺有餘の高さなる大小九基の古墳墓なりて並
立す一往前に十三ありしが今十三家の移るに何の
心寄蔑の塔の古式を掘んる石層塔にして指月庵
に於ける源頼朝の墓標と異同形にして土俗傳へて
禪閑處雖多殉死従士の死屍を葬めたる旧址な
りと且つ古来此地を御洞尾と呼へるハ分かり此地
を洞閉せしなりの日、起臥栖居の僧室を置
かんし伽藍を旧址なるハ今尚南北の数移を存す

と云ふ

一温泉場の西北三四町宮小山の地を桂流と称し源將軍の墓域と称されしと云ふ神黄河の墓と唱へ小石祠を建て毎年八月祭祀を行へりと其祠中に安置せる石像を見るに弓箭を携へ形状甚だ古朴なり、因つて思ふに建久四年の秋源頼朝の侍臣窮奇遺跡を埋葬せしも猶尽を憚り八幡神に擬して祀りたるなるべし、而して此の遺跡を発掘すべきことなりしも此の地なるを公表せざりしなり、其後一二有志碑碣を建て詳細事跡を勒するあるべし

○修善寺の旅宿に泊すること三日日毎聊か倦まず漫筆を筆を把り畢もなきまま時間をつぶす、

代睡録に代醒録に、家石毎の客を接して口こ任せて談するのを即時消へ失せるが、えを紙に書うつしまんれば、さてもあまりて在まる、湯流場に業硯無ければ無益のこと

八月十五の記

一前に文那の鐵泊のことを思ひ出したるを山嶽に登攀して渇を癒へた時のつらさである、水泡のごとき事事物物に重量を感ずること身体につけること出来ないとなること何んで渇を慰するこの、日本ひき梅干をしやぶるのが一法とのことである、外国でもバタを

嘗めるのが醫湯の一法となり、これを模倣
アルペン踏破のとき、あまねく敷くことも
実效を認めたる事実である
一 山登りも直立の巖壁を攀ぢ登ぶ巧者と許さ
れるに拘はるるつれ、北京味と於て従来の登山と
ハ大分違つて来た、勿論直立の巖壁を上る
ことも種々の工夫が要る、巖壁へ釘を打つて
足場を造つたり、綱を張つたりされる種類の
りまるのであるが、後ろ多分登攀用の種
々の機械器具の出来も、進んで登
攀を容易と果し得る日も来るであらうが、
そうなると喚嶽登攀も手柄でなくなるであ

ろ、その工風の紛糾する時代は即ち花時である
一 探検を命ずるの仕事であるから、苦を度外に
おき何のをう得ん為めであるか、西洋人がこれを
隣侯のごとし、人の為んを企てをするものを見て
羨ましいと云ふ、然るに不文明の東洋あるい
でもこんな企をやくと戦栗して、実に御
苦労な事だと、或人と吊慰的の言を発する、
文野の相違ハコンナ点にも現はれる、日本も漸
やく進んで来て可なり現はれる、日本も漸
なつ冒険者、のと言ハしい

一費）東洋うまと誇張の言語の多いと云われてみる中のも支那の形容詞も誇張きょうとどと外人なんとも云の様、そうと思つて往つて見ると決してそうでもないと感じ、支那の詩人などが出放題もっぱい大きいことを云うのみる為、支那の天地も

のるも大きいので詩人の思ひ切つた形容も相当なる感ぜうする、宮殿などの形容詞も大袈裟であるが、宮殿を見ると強ち誇張でないことを合得さる、支那の物も大きい宮殿もの世界の物も生、

[illegible]

東例へば河の方面の城郭を守り城壁と雲ハるいて詩人の誇張の物の感ぜしが今も国の実物徴しも之れを正すことの出来ない、保し今の現在の萬寿山の離宮などう似たものい、阿房宮もどうやらるも大きこうつたとすると、

四宮殿の内について東る、萬里の長城、事実も萬里無い、亦頗る断續的のものである、これらを参

張と云へバ三(もしくハ)あらう海の廣い圓の内
丈の城郭、それを萬里と形容さんとも狹い圓
土のことを計数一盤指りで指図しまく
じゐする、北地文部のことき大ろう土壤を指して
ハ吾々う意味ハ大かれ海岸ハ多くある、例
へハ砌潰の黄塵う降つて高ろ〳〵天地を黄色に
変することや、蝗羣の天を掩めて一空為めに異色
と変することき、利尾日本ろう想像つかぬこ
とで、此等を言ひあらはすろ日本ろひとを一寸
言葉の窮する位である、流れに乗じ拘泥するう
ちハマル言葉の文部ハ存ずるそれを藉り
まり無理ハ結ハ似ることハメルのハ日本人ひあ

ろ、奉張の議ハ安ろ日本人(世界)の事ハ
ろ言ふべきこと
一青島や旅順大連あるいハ露西亜人の建てた家を
二三見た、光ろ中ろ二軒並んでおるのもあつたが不
図第の陽いたるを、五ツ六ツ隣ろ家ろ
側面ろ絶無ろ窓ろ無つた、東面の日本人某
ろ露西亜ろ家屋の建築法ハ禁しおるとと
言ふた、隣家日本ろ窓を明けたるあるの家
内の秘密ハ(見られ)ろ、それを無ろ
禁制も便利ろ知れぬ、ハ(ハ)ろ
するとろ明るい所ハ明るい風を
ろ斯ろ禁令あるや

一●元久の昔し新家う浴構中ゟ銭七文ニ付湯を仰ぐ
ゟ寛政紀を調べて見ると新湯といふ共同浴ゟ七個
の一ゟ多いが、それ以前ゟ虎渓橋

の南側にあつて中の湯と称してゐる、往古を偲ぶの湯と称せられ源公憲雅の名をとゞめて久しく廢絶し居るが、たゞ後嵯峨院の時、伊[illegible]之修善寺紙と言ふが古来名高く平家物語東鑑にも北条氏より、宮紙谷村なる三椀氏なる家原を得て貢紙の許狀ハ今も存せりとの、北紙を色紙と称し藤の木の皮を黄に染むるこゝ所の藤禍色を帯び蝕の悪いなること、紙を如むおのん此所をさること二三の商庵の漉んと試みしも篠悪の紙の如き(原田を)せざりし、但し墨紙も今日蓼の木の皮を以て染むるこの黄色藤禍色なるを認めれ、是の北紙を蓼紙と

名つけ来れり、

一 いつも旅行する度ごとに手鞄を掃除して見ることゝ一枚の新聞紙の切れを出すこと、何もを検すること大隈先生の演説時蘇峰が某の国民新聞に掲載したる長文の論文であつて、當時を振り刺び何も後世皇道もろうとして、或る人から是北一読せよと言はれて、何の折りも読もて見ようと鞄の底の掃り込んで其儘にしてゐたと見える、幸ひに無聊で産花の絶えも読みあ比折も幸ひの論文(長)しに、此の論文を所謂一頁も亘る長篇なるに、蓋もびあるを茂の一代の事跡が論評せられてゐる、簡単ながら頗る

要を得てみる、藤降を候の懐る入つ
裏切つたりし女男である、決しても先候こ
隨喜者でも崇拜者ひもるに、但つ彼の
の筆を徒て人を惑
占める、のつ洋の特徴
を得
評論
者う千の七八を占めてみる、彼の
被つてゐるか到頭先生の崇拜者
敵あることの出来ぬ、
八云ひ折角今まで保存された、石屋の
屑に成る業を
めおくことよう

あつた。彼は共産主義の思

めのよくして、愚痴を滾さず、敵
許し、敵を忘る、點に於ては、彼
就て學ぶ可きであつたらう。

彼の思想の核心

は高遠の理想を說いたが、然も
は維新時代の志士に他ならなか
た。彼の中心思想は、皇室中心主
者で、云はゞ文治的帝國主義者
あつた。彼は如何なる程度迄、
モクラシーを理解して居た乎。
は青人が鮮にする能はざる
であるが、然も一國の政治は、
衆の爲めに、民衆の手により、行
れねばならぬと云ふ事は、深く
彼の胸底に印したる思想であつた

四 しい。
彼は早稲田を敎育すると同時に、
學早稲田から敎育せられた。早稲田
大學の最も模範的卒業生は、恐ら
くは其の創立者であらう。乃ち彼
の如きは、終身の學生だ。不老の
老人だ。不朽の老人だ。

誇り

此の如く彼は明治、大正にかけて
の幾多の人物中、全く毛色の變り
たる怪物であつた。彼の兒分は、固
より彼を大偉人と云ふであらう。
乃ち兒分でない者も、決して然ら
ずと反對する理由はあるまい。彼
は實に我が日本國民の誇りの一で
ある。恐らくは幾百歲の後迄も、其
の一であらう。豈に唯た百二十五
歲に止らんや。彼去りて我が大日
本帝國は、淋しくなつた。

噫大隈侯

貞義

うつせみの世のなが人の誓約言
神はうけずと神あがりきや
世の中はまこと常なし大くまの
早稲田の臭の神さるおもへは
天の下の人てふ人をもてして
世をおくりしぞ世に稀らなる

號外發行

昨朝大隈侯薨去を速せり

社會問題叢話

世界的量論の完譯
出づ純粹原作
輕快

まぼろしの民論調譯

第四編

北原白秋氏著 兎の眼 電人ビの服 王 謹 報 賞

德永壽美子著 蕾 薇 の 踊 子 謹 報 賞

偉人大隈の死

大正十一年一月十日午前四時四十分

危篤のまゝ早稲田邸に病臥中だつた大隈重信侯は九日夕刻より全く危險に陷り稲田博士を始め數人の醫師、綾子刀自を始め武富時敏、三枝守富、鹽澤早大學長等七人の屍近者に護られつゝ四回のカンフル注射も其の甲斐なく十日午前四時四十分遂に薨去した、年八十五歳、大隈家では同夜七時を以て「午前六時薨去」として發喪した

從一位頸飾章

老侯死後の光榮

大隈侯病氣危篤の報天聽に達するや十日特旨を以て左の如く從一位宣下並に菊花章頸飾加授の御沙汰ありたり

正二位大勳位侯爵　大隈重信

叙從一位（特旨を以て位一級被進）

授菊花章頸飾

依つて午後六時宮內省當局者は菊花章頸飾並に從一位の位記を携へて大隈邸に赴き合祭伺候常民に面會して夫れ〳〵傳達したり尚公爵には明日授けられすと

弔問使御差遣

關屋次官沼津伺候

大隈侯薨去の內報に接したる宮內當局者は葉山御用邸に御滯在中の摂政殿下に右の總傳奏の手續を終へすと同時に關屋次官は沼津御用邸に御滯在中なる摂政宮殿下に奏上し同時に關屋次官は沼津御用邸に伺候右の總奏上したる旨を傳へし同次官は退出直に沼津驛より御召列車にて歸京したるが多分十一日午前九時半東京驛に着にて御用邸に差遣はさるべしと

大隈侯

世界の損失

蘇峰生

大正十一年一月十日、大隈侯薨ず。行年八十有五歳、嗚呼、悲哀。

我が日本帝國は、大隈侯の死により、世界に於ける其の代表者を喪うた。我が日本國民は、大隈侯の死によりて、一國に於ける其の先達者を亡うた。我が日本の際年は、大隈侯の死によりて、其の指導者を失うた。而して全地球と云はざる迄も、太平洋の西、印度洋の東に於ける地域に於て、一の名物男を少くした事は、確かに世界の損失と云はねばならぬ。

福壽圓滿

本來一百二十歳を以て、人間の定命とする說を高唱したる、大隈侯爵よりすれば、八十五歳は、名殘り多きが、然も尊人の壽命より見れば、大隈侯は確實に長生したる人物なれば、大隈侯は其の壽終に際しても、亦た幸運の人と云はねばならぬ。何となれば其の一生の過半は、殆んど戰鬪にて始終した大隈侯も、即今、上は九重より特別の恩顧を蒙うし、下は市井の民衆に仰慕せられ。從來其の攻敵に

毛色の變りたる怪物

老快人

大隈と大久保

明治政治史の謎題

大久保死後の三人男

政黨と教育

公人としての總合商店

百科全書的

彼の政治的生涯の上半期

再び入閣す

大隈內閣

彼の辭職

社會的に於ける大隈

伊藤大隈の太刀打

演說と坐談

彼の大風呂敷

畢生本領在彈力

環境に變化する大隈

松隈內閣と隈板內閣

門戶開放

八方無礙の應用力

彼の思想の核心

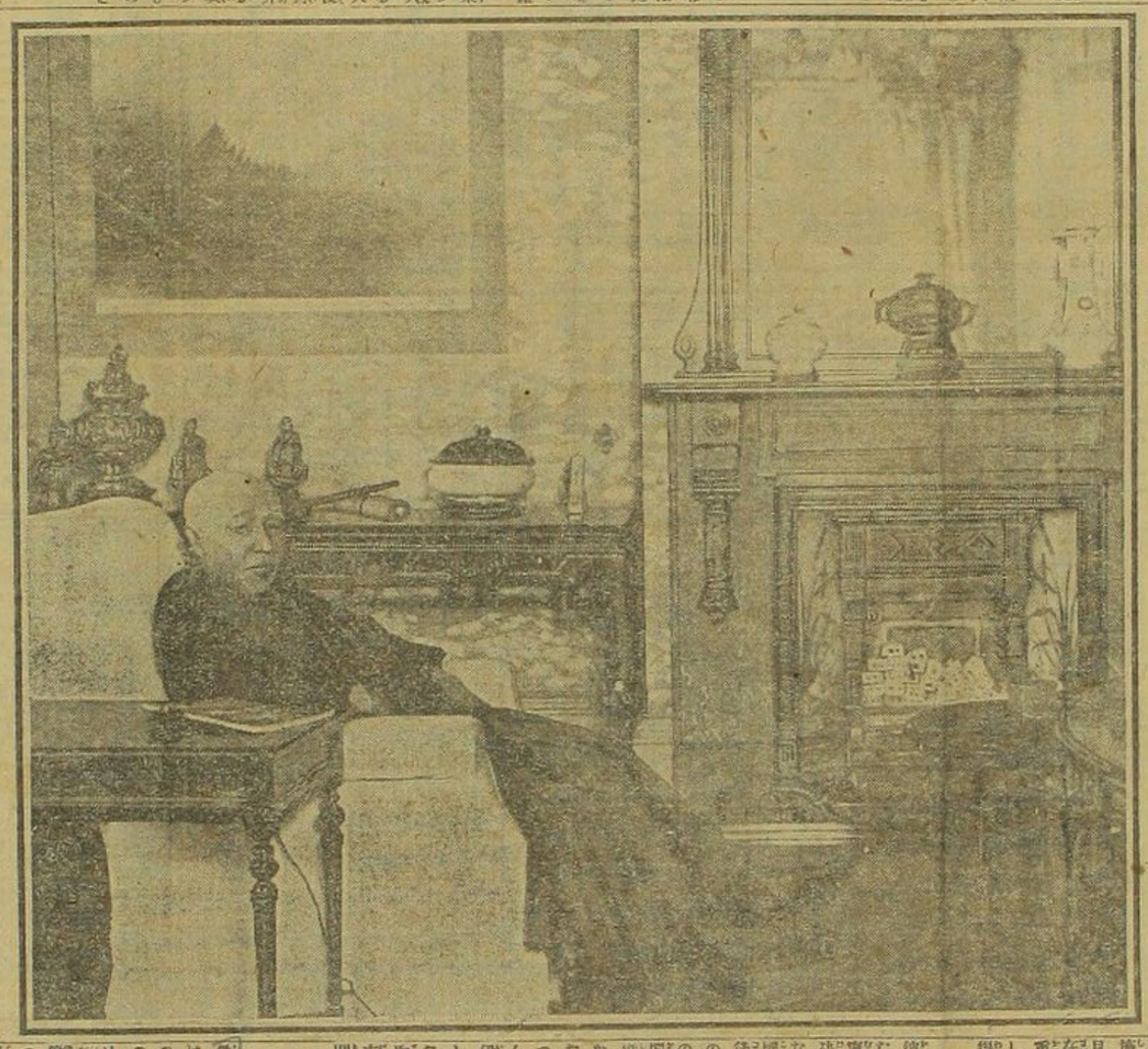
日本國民の誇り

家庭に於ける彼

間口の廣き智識の庫

天成の大記者

號外發行



吁大隈老侯（昨冬發病前早稲田邸應接間に於ける撮影）

偉人大隈の死

大正十一年一月十日午前四時四十分

危篤のまゝ早稲田邸に病臥中だつた大隈重信侯は九日夕刻より全く危險に陥り稲田博士を始め數人の醫師、綾子刀自を始め武富時敏、三枝守富、鹽澤早大學長等七人の昵近者に護られつゝ四回のカンフル注射も其の甲斐なく十日午前四時四十分遂に薨去した、年八十五歳、大隈家では同夜七時を以て「午前六時薨去」として發喪した

從一位頸飾章

老侯死後の光榮

大隈侯病氣危篤の報天聞に達するや十日特旨を以て左の如く從一位宣下並に菊花章頸飾加授の御沙汰ありたり

正二位大勳位侯爵 大隈重信

叙從一位(特旨を以て位一級被進)

授菊花章頸飾

依つて午後六時下條内閣書記官は菊花章頸飾並に從一位の假位記を携へて大隈邸に赴き令嗣信常氏に面會して夫れ〳〵傳達したり尚公爵には陞爵されすと

弔問使御差遣

關屋次官沼津伺候

大隈侯逝去の内報に接したる宮内當局は直ちに殿下には謹々御下問あり且つ叙位叙勲の御沙汰あらせらるべき旨を承し同次官は退出直に沼津驛より特別急行汽車にて歸京したるが多分十一日長崎通りより吊問使を同邸に差遣はさるべしと

同御用邸に伺候右の趣奏上した

大隈侯

蘇峰生

世界の損失

大正十一年一月十日、大隈侯逝く。行年八十有五歳。嗚呼、悲夫。

我が日本帝國は、大隈侯の死により、世界に於ける其の代表者を喪うた。我が日本國民は、大隈侯の死により、一國に於ける其の先達者を喪うた。我が日本の前途は、大隈侯の死により、其の指導者を失うた。而して全地球を云はざる迄も、太平洋の西、印度洋の東に於ける地域に於て、一の名物男を少くした事は、確かに世界の損失と云はねばならぬ。

福壽圓滿

本來、一百二十五歳を以て、人間の定命とする說を高唱したる、大隈侯爵人よりすれば、八十五歳は、名殘り多きが、尚も尋常人の壽命よりすれば、大隈侯は福壽兩全ながら圓滿に庶幾し云はねばならぬ。一度死せねばならぬが、人間の運命とすれば、大隈侯は其の臨終に際しても、亦た幸運の人と云はねばならぬ。何となれば其の一生の過半は、殆んど戰鬪に終始した大隈侯も、即今、上は九重より特別の恩寵を忝うし、下は市井の民に仰慕せられ。從來其の政敵に云はれ、吾人は彼を偉りに愛慕もせぬ。今少し厳徹したものではあるまい乎。

百科全書的

彼の頭腦は百科全書的であつた、骨に云へば、偉りに心服もせぬ。併し彼が尋常人の及ぶ可らざる資格を、最も多量に、豐富に、且つ備へたる事は、如何なる彼の敵でも、之を抹殺する事が能はぬ。此點に於いて、吾人は彼を驚嘆するを禁じ得ない。世或は彼に老偉人と云ふ稱號を愛しむ者あるも、彼の老に老偉人に老偉人の稱號を愛しみ得ず者はあるまい。然も快さ傳と相距る幾許ぞ。

公人として

の總合商店

彼の變化多くして、年を奥に瀕よらんとせば、吾人は一部の日本現代史を叙するの危險に陥る。されは、彼は蘇秦張儀の處分を俄ては極めて手緩かに逆んん攻城野戰の武勲以外、廟議の末期より、明治、大正の現時に至る迄、あらゆる國家の進運に貢獻せないものはない。彼の干係したる一部の事を以てしても、尚ほ博ふ可きものがある。況んや彼はそれを全部に於てをや。

彼は政治の方面に於ては、伊藤、山縣と抗衡した。外交に於ては、井上、松方と抗衡した。外交に於ては、陸奥と抗衡した。教育文化の方面に於ては、福澤と抗衡した。彼の功勲は、必らずしも上に出でた上の後を承けて、極めて厄介なる財政の面に當つた。同時に地租改正の業にも關與した。明治七年の西南役、明治十年の西南役、明治十四年の政變等の重責に當りて、一時のやり繰りをつけた。やり繰り屋としての彼は天下一品であつた。

彼の政治的生涯の上半期

彼の公人として頭角を露はしたのは、戊辰の際、長崎に於ける、耶蘇教徒の處分に際してであつた。彼は他の政治家、特に伊藤、井上の徒に比し、寧ろ外人を畏憚しなかつた。彼は當時虎疫を持ゝづるの感を持つて來いと云ふが、彼の意氣込であつた。而して隈侯に、拔群の才能が現呈せしめた。

彼は伊藤、井上等と所謂第地樂山治の三人男として、鑑意軍新の業に從つた。而して其の後若無人の言動は、藩閥を憤慨を受くるに至つた。彼は岩倉、木戸、大久保、伊藤等の米國巡遊の留守居役として、西鄕、板垣等の武斷派に對し、少からぬ苦心をした。彼は井上馨と共に、明治政制定、財政の基礎を定め、正の業にも關與した。明治七年の臺灣役、明治十年の西南役、何れも彼は時代の重責に當りて、一時のやり繰りをつけた。やり繰り屋としての彼は天下一品であつた。

大隈と大久保

彼は其の豪傑なる生活を云はんよりは、寧ろ他人の如く隱遁を好まれたる生活を爲す能はざりしなり。彼は一人は、寧ろ他人の如く隱遁を好まれたる生活を爲す能はざりしなり。明治地に大名然たる生活を以て他の嫉視を受け。

松方と抗衡した。彼は岩倉、木戸、大久保、伊藤等の米國巡遊の留守居役として、西鄕、板垣等の武斷派に對し、少からぬ苦心をした。彼は井上馨と共に、明治政制定、財政の基礎を定め、正の業にも關與した。明治七年の臺灣役、明治十年の西南役、何れも彼は時代の重責に當りて、一時のやり繰りをつけた。やり繰り屋としての彼は天下一品であつた。

毛色の變りたる怪物

本文の記者も、亦た大隈侯其人に親炙したる一人である。平心に考へれば、彼に大英雄か、大豪傑と云ふ稱號を上ろうは、何となく穩當を缺く感じがする。併し彼を何と云うたらば、適當であらうか。之に對する答へは、彼は明治、大正の時代に於ける、一種の總合體、閉口せしめた。

彼は明治六年大隈侯爵の破裂より、明治十一年五月大久保の橫死に至る迄、大隈、伊藤、井上の三人組の一個の怪物であつた。一切の乘除を爲しても、尚ほ彼は尋常碌々の徒でなかつた。

老快人

彼は歷史、明治、大正の三代にかけて、日本の歷史に、若干の印象を殘したる名物男に相違ない。恐らくは名物男と云ふが、最も吾人の彼に對する感情を、適當に言ひ表はしたものであらう。卒直に云へは、下は市井の民現はしたものであらう。

大隈侯

世界の損失

大正十一年一月十日、大隈侯逝く。行年八十有五歳。嗚呼、悲夫。

我が日本帝國は、大隈侯の死により、世界に於ける其の代表者を喪うた。我が日本國民は、大隈侯の死により、一國に於ける其の先達者を喪うた。我が日本の前途は、大隈侯の死により、其の指導者を失うた。而して全地球を云はざる迄も、太平洋の西、印度洋の東に於ける地域に於て、一の名物男を少くした事は、確かに世界の損失と云はねばならぬ。

福壽圓滿

本來、一百二十五歳を以て、人間の定命とする說を高唱したる、大隈侯爵人よりすれば、八十五歳は、名殘り多きが、尚も尋常人の壽命よりすれば、大隈侯は福壽兩全ながら圓滿に庶幾し云はねばならぬ。一度死せねばならぬが、人間の運命とすれば、大隈侯は其の臨終に際しても、亦た幸運の人と云はねばならぬ。何となれば其の一生の過半は、殆んど戰鬪に終始した大隈侯も、即今、上は九重より特別の恩寵を忝うし、下は市井の民に仰慕せられ。從來其の政敵に云はれ、吾人は彼を偉りに愛慕もせぬ。今少し厳徹したものではあるまい乎。

百科全書的

彼の頭腦は百科全書的であつた、骨に云へば、偉りに心服もせぬ。併し彼が尋常人の及ぶ可らざる資格を、最も多量に、豐富に、且つ備へたる事は、如何なる彼の敵でも、之を抹殺する事が能はぬ。此點に於いて、吾人は彼を驚嘆するを禁じ得ない。世或は彼に老偉人と云ふ稱號を愛しむ者あるも、彼の老に老偉人の稱號を愛しみ得ず者はあるまい。然も快さ傳と相距る幾許ぞ。

公人として

の總合商店

彼の變化多くして、年を奥に瀕よらんとせば、吾人は一部の日本現代史を叙するの危險に陥る。されは、彼は蘇秦張儀の處分を極めて手緩かに逆んん攻城野戰の武勲以外、廟議の末期より、明治、大正の現時に至る迄、あらゆる國家の進運に貢獻せないものはない。彼の干係したる一部の事を以てしても、尚ほ博ふ可きものがある。況んや彼はそれを全部に於てをや。

彼は政治の方面に於ては、伊藤、山縣と抗衡した。外交に於ては、井上、松方と抗衡した。外交に於ては、陸奥と抗衡した。教育文化の方面に於ては、福澤と抗衡した。彼の功勲は、必らずしも上に出でた上の後を承けて、極めて厄介なる財政の面に當つた。同時に地租改正の業にも關與した。明治七年の臺灣役、明治十年の西南役、何れも彼は時代の重責に當りて、一時のやり繰りをつけた。やり繰り屋としての彼は天下一品であつた。

彼の政治的生涯の上半期

彼の公人として頭角を露はしたのは、戊辰の際、長崎に於ける、耶蘇教徒の處分に際してであつた。彼は新政府の東京に建立せらゝや、彼は伊藤、井上等と所謂第地樂山治の三人男として、鑑意軍新の業に從つた。而して其の後若無人の言動は、藩閥を憤慨を受くるに至つた。彼は岩倉、木戸、大久保、伊藤等の米國巡遊の留守居役として、西鄕、板垣等の武斷派に對し、少からぬ苦心をした。彼は井上馨と共に、明治政制定、財政の基礎を定め、正の業にも關與した。明治七年の臺灣役、明治十年の西南役、何れも彼は時代の重責に當りて、一時のやり繰りをつけた。やり繰り屋としての彼は天下一品であつた。

大隈と大久保

彼は其の豪傑なる生活を云はんよりは、寧ろ他人の如く隱遁を好まれたる生活を爲す能はざりしなり。彼は一人は、寧ろ他人の如く隱遁を好まれたる生活を爲す能はざりしなり。明治地に大名然たる生活を以て他の嫉視を受け。

毛色の變りたる怪物

本文の記者も、亦た大隈侯其人に親炙したる一人である。平心に考へれば、彼に大英雄か、大豪傑と云ふ稱號を上ろうは、何となく穩當を缺く感じがする。併し彼を何と云うたらば、適當であらうか。之に對する答へは、彼は明治、大正の時代に於ける、一種の總合體、閉口せしめた。

彼は明治六年大隈侯爵の破裂より、明治十一年五月大久保の橫死に至る迄、大隈、伊藤、井上の三人組の一個の怪物であつた。一切の乘除を爲しても、尚ほ彼は尋常碌々の徒でなかつた。

老快人

彼は歷史、明治、大正の三代にかけて、日本の歷史に、若干の印象を殘したる名物男に相違ない。恐らくは名物男と云ふが、最も吾人の彼に對する感情を、適當に言ひ表はしたものであらう。卒直に云へは、下は市井の民現はしたものであらう。

明治政治史

の謎題

然るに大隈と伊藤との間に、葛藤勃發、物産、酒商、貿易等、所謂「三藩」なる迄、明治政府は、大久保を中心として、大隈、伊藤を兩翼として進行した。適切に云へは、政府の生命は、專ら此の三人の手にありと云ふも可き井上を嫉厭し、之を大久保の橫死後、井上も鏡臺に現はれ來つた。明治十一年五月から、同十四年十月大隈の政府を去る迄は、明治政府の大立者は、

は明治政治史中のて、今尚は明々地る者がない。伊藤、は、大隈が拔擢の其の政友を裏切つ側より云へば、伊長の武斷派に威嚇く政友の首を切つ降つたと云ふ。何分はある。併し此中尤も興味の多き人は姑く預り置く此れからが、變化の後半生の幕が開

と教育

魂の歸まつた大隈

史強。廟堂の高峰より、役人の肩書を付けら突き墮された。それに一方には改進黨を組織黨魁として、且つは教には早稻田に學校を設の分限は、此時から發於て、旣に民間に若干植してゐた。その一はあつた。一言に云へは業と、日本の金融業とふ所が多大である。三は、彼を除却しては、くとが能はぬ。正金銀亦た然りた。而して、通商、貿易等、所謂の保護政策は、其の惡

果を來したにせよ、營業を癈したにせよ。殆んど悉く彼の手を經由せぬものは無つた。諺に逸材普用と云ふが、福澤門下の政治思想ある者の八九分通りは、彼の傘下に集つた。更らに小野梓の率ゐたる少壯大學生の一部も、亦た然りた。而して彼は蚤に新聞なるものに著眼し、その方面に連絡を取つてゐた。されは大隈の政黨製造は、成長でなく製造であつたが、正しく急場の間に合ふ丈の準備は出來てゐた。」

政府は、正面の敵である板垣の自由黨よりも、昨日迄は同釜の飯を食つたる大隈の改進黨を、より多く惡んだ。而して政府筋の離間策は、甘くも此間に行はれ、自由黨と改進黨との同志打が始まつた。

環境に變化する大隈

從來の大隈は、口を「へ」の字形に結んで、何となく鹿爪らしき男であつた。好物の標本と云はれても、致方なき程不愛相の男であつた。然も彼は能く環境に適應する長技を持つてゐた。此の殿樣は、何時の間にやら、先生ともつかず、親分ともつかず、極めて親み近く可き、一個の民衆的先達と化し來つた。此れは固より一瞬間の早業ではなかつた。可なり長き歲時を要した。然も改進黨を作つて、第一に政黨化した者は、大隈當人た。早稻田の學校を創立して、第一に敎育せられた者は、大隈當人た。早稻田校友會の筆頭には、誰が何と云うても、其の創立者を置くとを忘れてはならぬ。早稻田氣質の權化は彼た。彼其人が則ち早稻田氣質た。

再び入閣す

惡緣は契り深して、喧嘩はしても伊藤、井上とは、切つて切れぬ緣がある。彼は明治廿一年二月に、久しく無沙汰であつた明治政府に入りて、井上の後を承けて、外務大臣となつた。彼には井上の跡掃除の役目を、先天的に引き受くる運があつた。明治六年の財政方面でも、彼は井上の跡を始末した。今度も井上の條約改正失敗の跡始末が、彼の重なる役目であつた。」

彼の條約改正は、不幸にして、井上の條約改正以上の物議を挑撥し、それが爲めに、彼は一脚を失うた。彼は不思議に生命に緣のある男た。彼が再び民間に下つた後は、政府は從前に過ぐるも及ばざるなき惡辣手段を以て、彼を迫害した。彼は樞密顧問も剝ぎ取られた。彼は一時兵糧攻に遭うた。

松隈內閣と隈板內閣

負けぬ氣の佐賀魂は、彼の本領た。彼は到頭辛抱し拔いた。而して明治二十九年には、松隈內閣が出來した。此の內閣は、多くの點に於て、彼が實際的政治家としての缺點を、擴大的に天下に暴露せしめた。然も新聞、雜誌の發行停止の惡法を廢止したる一事のみにても、彼に感謝す可き事實は嚴存してゐる。而して彼は又た伊藤の取持にて、明治三十一年六月には、內閣の首班となり、隈板內閣を組織した。此れは松隈內閣以上の失敗であつたが。それは總ての政黨者流、及び之を妨害したる官僚者流の、平等に分擔す可きもので、必らずしも彼一人の責任に、歸す可きものではあるまい。

大隈內閣

離れしも大隈の政治的生命は、此れが最後である可く想はしめた。然るに意外にも、大正三年四月、彼は老友井上の周旋にて、七十有七歲にて、又た內閣を組織し、大正四年十一月の京都に於ける御卽位式、大嘗會等は、彼が在職中に施行せられた。日本が大正三年八月、世界大戰參加も、固より彼の在職中の事た。彼は大正四年に、重ねて爆裂彈に襲はれたが、又たしも生命に緣ありて、無事なるを得た。

彼の辭職

彼は大正五年の十月に其職を辭したが、然も周圍の事情の爲めに、寧ろ餘儀なく辭したのであつて、決して自から好んで辭したのではなかつた。その證據には、苟も國家の大事とあらば、何時でも最後の御奉公をするとは、彼の口癖の樣に言明した言葉であつた。其の言葉通りに信ずるならば、原內閣の後を承けて、今一度內閣を組織するの希望があつたかも知れぬ。若し周邊の事情が、彼に迫つたならば、決して之を辭退しなかつたであらうと思はれた。此の如くして、彼は政治方面に於ても、伊藤よりも、井上よりも、長く久しく存へた。其の功科表を計上した後でなければ、伊藤との對照は取れぬが、政治的壽命の長かつた丈は、彼が壽命の長かつた如くに、間違ない事實た。」

社會的に於ける大隈

併し單に政治家として彼を見るは、彼を縮小するものた。政治は彼の一部分た、否な一小部分た。彼の輪郭は、社會的に觀察して、始めて能く判る。云はゞ政治も、敎育も、經濟も、彼をして社會的に働かしむる手段、方便に過ぎなかつた。彼の早稻田邸は、私設國際倶樂部であつた。世界の旅客は、日光は見ずとも、箱根には赴かずとも、奈良や、京都には遊はずとも。先づ早稻田の老人に丈は面會せずしては、還らなかつた。日本に富士山あるを知る程の外人は、日本に大隈あるを知らぬものはなかつた。此の意味に於て、彼は正しく國民的代表者であつた。國內では早稻田老人の駄法螺として、冷笑せられたる言も。世界は重大事件として、之を受取つた。併し國際的に、此の通りであれば、國民的には、猶更らの事であつた。」

門戶開放

凡そ門戶開放と云ふ言葉を、文字通りに活用したものは、日本國中に於て、早稻田邸であつた。何人でも彼に歡迎せられた。曾て彼が嘗族的趣味者である如く誤解したる者も、一たび早稻田に赴けは、其の一切平等的待遇に感謝せざるを得なかつた。彼は實に廣大敎化主であつた。彼の早稻田邸は、人間の手形交換所であつた。何等の差別がなく、隨意に取引せられた。但た彼の餘りに寬大なる、時としては不渡手形さへも、頗々と通用せしめた。」

間口の廣き智識の庫

彼の智識は、其の奧行に於ては、左程でも無つたが、其の間口は實に廣かつた。餘りに廣くして、何處が入口か判らない程であつた。如何なる問題にも、相當の理解があり、相當の興味を持つてゐた。若し強ひて其の稀薄なる部分を指摘すれは、法律、制度、文藝、美術等の方面であらう。併しそれさへも他と議論を上下するに、毫も差支なかつた。其の强點は、歷史、及び時事問題であつた。而して統計の如きは、其の最も擅場であつた。或人は彼の學問を耳學問と云ふが、目から得た分量は、決して少くなかつた。何れにせよ、彼は無類の記憶力の持主であつた。然も其の記憶が、數字に於て、最も銳敏で、且つ精詳であつた。

演說と坐談

演說も專門家ならざる者としては、決してまづくなかつた。坐談はそれよりも、長技であつた。然も其の最も長所は、半坐談、半講演であつた。卽ち十數人、若しくは數十人に取り捲れ、之を相手に、其の無盡藏の記憶から、機智の配劑によりて、呑蘭の絲を吐く如く、秋蛛の網を造る如く、巧妙自在に緒じ去り緒し來る事た。

伊藤大隈の太刀打

凡そ世の中に、公會の席に於ける伊藤と、大隈の試合程、面白きものはなかつた。川中島に於ける不識菴、機山の立合も、此程ではあるまいと思はれた。彼等は座に第三者の存在するを忘れなかつた。而して一上一下、互ひに揶揄し、互ひに批判し、互ひに其の弱點を衝き、時としては其の樂屋落さへも、さらけ出すを遲疑しなかつた。記者は明治四十二年十月、首相官邸に於ける、桂首相の伊藤の滿洲旅行送宴に列し、大隈の隣席に坐し、兩雄の太刀打を目睹耳聞した。而して最後に伊藤は自から立て、大隈の爲めに乾杯の辭を陳べた。此れが正しく大隈、伊藤の死別であつた。長き友人であり、且つ喧嘩相手であつた伊藤、大隈は此の如くして互ひに相ひ別れた。

但た第三者として云へは、卓上の論談に於ては、大隈に六分の强味があつた。然も廟堂の評議に於ては、或は其の比例が顚倒したかも知れぬ。

八方無礙の應用力

彼は必らずしも創始、獨創に於て、其の大なる素質を示さなかつた。然も其の應用力に至りては、八方無礙であつた。彼は共產主義の思想者でなかつたが、思想の共產主義者であつた。彼は意見、議論に於て、決して所有權を認めなかつた。彼の頭腦は、巨大なる海綿であつた。如何なる液體にあれ、之を吸ひ盡さずんば止まなかつた。前回に彼に進言した者が、次回に彼より其言を說法せらるゝが如きは、尋常の茶飯であつた。彼の頭腦は、精鍊せられなかつたが、同時に硬化しなかつた。常に銳の老少年とは、正しく彼の事であらう。此の一點に於ては、虞翁と雖も、彼程に新らしき物を平氣で、受け容るとは能はなかつた。

彼の外國語の素養は、頗る覺束なかつた。彼は足一たび橫濱を出て、海外に遊ばなかつた。然も凡そ古今東西の事、其の形而上と、形而下とを問はず、一として彼の預かり知らざるものは無つた。單に此れのみにても、彼は現代に於ける、一個の驚異であつた。」

彼の大風呂敷

彼は言必信、行必果と云ふが如き立前の人ではなかつた。而して一度面倒を見た者は、一生面倒を見ると云ふ程でもなかつた。云はゞ彼の大風呂敷の中には、恒に或物が在つたが、必らずしも同一物では無かつた。若し其の統率力が乏しかつたとすれば、其の包容力は多かつた。若し其の政友を輕輕しく手離したとすれば、政敵を手緊しく追窮しなかつた。

畢生本領在彈力

彼の一生を始終したのは、彈力であつた。彼の彈力は、鋼鐵板の如く、薩長の藩閥と對抗して、三十餘年、曾て屈撓しなかつた。握手はしたが、叩頭はしなかつた。妥協はしたが、降參はしなかつた。然も彼の如く戰鬪的生涯を始終しても、彼が如く心地の和平、寬厚なるものは、殆んど比類がない。彼の精神にも、彼の性情にも、彼の風采、態度にも、殆んど五十年間、惡戰、苦鬪、慘霜、虐雪の痕跡を留めなかつた。此の一點に於ては、彼は恐らくは大人の資格があつたであらう。自から基督敎的老紳士を以て居た虞翁さへも、其の諦めのよくして、愚痴を溢さず、敵を許し、敵を忘るゝ點に於ては、彼に就て學ぶ可きであつたらう。

彼の思想の核心

彼は高遠の理想を說いたが、然も彼は維新時代の志士に他ならなかつた。彼の中心思想は、皇室中心主義者で、云はゞ文治的帝國主義者であつた。彼は如何なる程度迄、デモクラシーを理解して居た乎。そは吾人が詳にする能はざる所であるが、然も一國の政治は、民衆の爲めに、民衆の手により、行はれねはならぬと云ふ事は、深く彼の胸底に印したる思想であつたらしい。

彼は早稻田を敎育すると同時に、早稻田から敎育せられた。早稻田大學の最も模範的卒業生は、恐らくは其の創立者であらう。乃ち彼の如きは、終身の學生た。不老の老人た。不朽の老人た。

家庭に於ける彼

尙ほ一言す可きは、彼が家をも身をも顧ざる、維新時代を經由して、隨分放縱なる生活を爲し來つた惡習を蟬蛻し、中年以來、比較的清淨なる家庭の主人公となつた事た。彼が家庭に於ける好々爺であつたことは勿論、其の老母に對する孝養の眞摯、懇到であつた事は、實に彼の人格を飾る可き、無二の勳章であつた。

公人を論ずるに、私德を以てするは、立論の基調を取り違へたる嫌あるも。私德の光は、公人の信用を厚からしむるに於て、決して無視す可きでない。況んや彼の如きは、單純なる政治家でなく、一代文化の大先達として、民衆より仰望せられたる一人なるに於てをや。」

天成の大記者

往く所として、可ならざるはなかりし彼の天分は、何れに尤も秀でたのである乎。そは容易に斷言は出來ぬが、假りに新聞記者として見れは、彼程の恰當の資格を具へたものはあるまい。彼は手にてペンを握らぬ丈が、記者としては不足だが、其他は實に申分なき記者であつた。予は明治三十二三年の頃、早稻田の新聞硏究會に於て、諸君は其の脚下に於て、一の大記者を持つてゐるではない乎と云うた。予は何よりも日本の最大なる新聞記者として、彼を見た。平たく云へは同業の先輩として彼を見た。而して此の大記者たるとが、彼に於ては最後迄の愉快であり、且つ誇りであつたらしい。

要するに彼は大論客であつた。彼の最後の事業は、東西文明の調和に對する、意見の著作であつたと聞く。而して其の完成せざるを以て、最大の遺憾としつゝあつたと聞く。富貴、功名兩ながら遂け去つた。尙ほ惓々忘る能はなかつたのは、此の世界的大問題の解釋であつた。唯た此の一事を見ても、如何に八十五翁の彼の頭腦が、淸鮮、銳敏であつたとが判る。此丈けでも吾人をして、彼に驚歎せしむるに餘りある。」

日本國民の誇り

此の如く彼は明治、大正にかけての幾多の人物中、全く毛色の變りたる怪物であつた。彼の見分は、固より彼を大偉人と云ふであらう。乃ち見分でない者も、決して然らずと反對する理由はあるまい。彼は實に我が日本國民の誇りの一である。恐らくは幾百歲の後迄も、其の一であらう。豈に唯た百二十五歲に止らんや。彼去りて我が大日本帝國は、淋しくなつた。」

噫大隈侯

貞義

うつせみの世のなか人の誓約言
神はうけずと神あがりきや

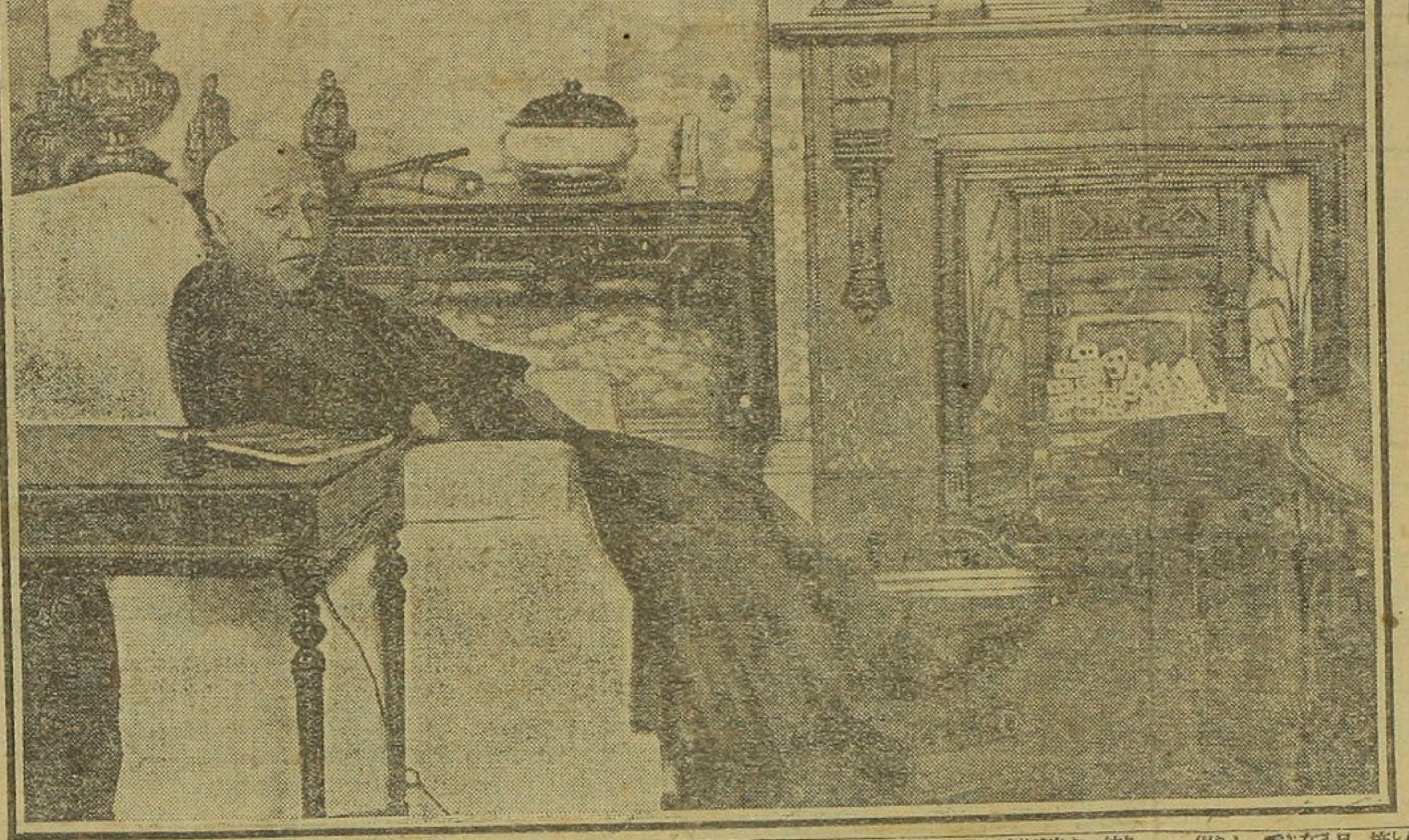
世の中はまこと常なし大くまの
早稻田の奧の神さるおもへは

天の下の人てふ人をさもさして
世をおくりしぞ世に稀らなる

號外發行

昨朝大隈侯薨去を速報せり

伏



（昨冬發病前早稻田邸應接間に於ける撮影）

談ぞひろ

米國奇談 紐育市の虎 今田定雄
英國奇談 野古村の家 濱邊卯牛
濱邊の高浪 田村西男
別天地 旭南作
信濃川の流 一馬麗星
土人の無い里 宗堆紗法
道の無い 安寺小鶴
洗濯屋夫婦 谷古葉泉

囲碁新局 加藤五良
將棋新手合 名人
釣案内 (たなごの釣の仕方と餌)

版界新春劈頭の收穫である。

第一篇、一、階級社會の發生的考察　二、社會戰の社會學　三、古代社會階級考　四、貴族階級の本質と心理と運命　五、軍人階級の社會史的考察

第二篇、一、社會主義と農民問題　二、農業の資本主義化と農民運動　三、中世末期の共產農民運動　四、歐西亞農民史概觀

第三篇、一、勞力絞取制度の社會史的考察　二、原始文明兩社會の結婚制度　三、商業制度の發生的考察　四、社會の進化と中間階級　五、奴隸制度の話　六、古代娼婦制度史考　七、[illegible]

第四篇、一、勞働者運動の指導倫理　二、社會運動思想と階級鬪爭說其他

早大教授　北澤新次郎著　(四六判布裝上製)　定價壹圓九拾錢　(箱入三百頁)　送料壹圓十五錢

再版

新社會の建設

發賣　東京神田西紅梅町　振替東京二七〇六五　同人社　電話(二九五[illegible])　神田(一五二〇)

壁頭せるブルヂョワ文化の介殼の內に合理的なる新社會的秩序を建設する核心は、世界の所謂文明國に年々歲々逐ふて高調進展せる勞働者の運動である。資本主義的經組織が齎らす害毒と禍惡は、之に依つて不當の利益を受くる少數の特權階級者以外のものの等しく痛感する所、若し人類が正義と平等との觀念に基づく社會生活を享樂んとならば、根本的社會改造を必要とし、そして今日あらゆる困難と犧牲とに堪えなさるゝ勞働者の集團的運動が來るべき新文明の中樞的勢力たる事は、少しでも此の事に思を致す者の理解する所である。本書は講堂に勞働者問題を講じ、街頭に實運動に參ぜる者が新社會に對する論策である。世上學者の片々たる机上論と同一すべからざるものである。

一

伊東忠太氏旅行隨筆　我霞山とどこうとこら

もすゝ似てゐる山をみたことがあるなあ

雲南省城を二日程の距離に降附近四方の西

南つゝ高い山が見えたと記し且つ次きの

ことき論評を試みてゐる、「吾人の信ずる所に由

れば凡そ山巒の外形は其基礎となるべき種類

に來由するものにして改變し變形し種種

の變化をなしつゝ無數の形を生じ生じ生じ

び比霞山は用ゐる此型を富んだ後に雲南の

嶽霞山は用ゐる型を富んだ彫刻とする謂ひべき數」と

えたる事も同感である、いくら生じ化といふ

全く異なる意匠を必千篇の山嶽を施すこと八出来ぬ、性ある限りあるいくつの意匠をいろ〳〵に会へども一寸形の変じ遠くとも変ずるぬ、全く同形の山を幾度きびとり霞山と戦雲山のみを限らぬ、こんを彦へると山形画家の意匠の甚だ貧しあること也一概を咎め目くんぬ、但し一寸組合せを四つ〳〵に全く異なる様を見せる業も決して凡脱ひい出来ぬ、例へば五百羅漢の面貌を悪く異なることもなく、耳口鼻や頭部双眼双眉脚手の出き様を有るのみ、此等の顔部の大小や位置や形うあしまつ

ても面相の全部が変化するから、五百の異形を書くことが出来ると思ひうへ加実際を試みた者の経験を信ずると二百位までも異なることを出来るが、さんうをドウ二百のどれこれと同じ様なつて来た第一の面貌に接ら形が全く自分丈の工夫へひもちダメと業を投じれと云ふと自流花に道化を共異なる面の如しとなる位は武信の人間を全く同じ様なる面の如しらぬ家の流儀基礎を出発の指揮を異なるとのことで忠七郎と称別の出来ぬるまで酷似のもの

ある

一 椎茸が修験寺の名産とゝなり家苞に買つて又比、其高麗こゝ雪を冠て抜しを、椎茸を毎年十二月から翌年の四月頃までに出来ると云附山の山こゝ出るのを生で東京へ出す、木干と唱へて太陽で干したのを輸出するとゝ云(支那)へ太陽で干したのを木干であるこゝ場(所)と唱へて深山こゝ出るのを生で東京へ出すと云附れを太陽で干すと或る腐敗することゝ火であるこゝ木干は東京へ出すのを多くこゝ比と云、味が感しこの北茸を雪の間に出ると云ことである、雪を冠つて抜別の美を交

けぬう吹雪と出来ると云、深山を雪を一こゝ(支那)う為めに出来ておそいと云、毎年四十二三番目程の産額と云ふ

一 青酒を沼綿で低むをいつても用いよい味であるそのまゝ浴後時刻ハまゝ冷ものとなる(位)ものあつたゝ、やッぱり、修験寺の温泉を汚ない桶を新こうして二日目に入くるこゝ比が、出来て来た時を浴槽の田式であつたのを、湯の交換を滋養比のとゝあるこゝ、湯の交換をすると見ハ、ゝと硫黄もてゝ抜を遠ゝ比ゝ比ポンを利く自分の桶あゝ浴湯する為めのもこの為め

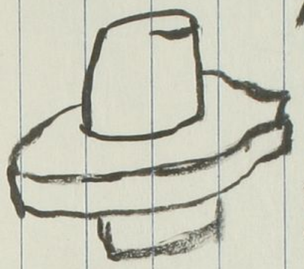
である

一　北地は小豆莫餅と云ふがある鑵子のつるのもの
まづ珍しいまる豆腐くが、あまのつまるるいもの
うで紅の色が何のもの興味を感じたのもいつぞ
やみちの一月三日の進山の河内大和屋の
家を訪ふた時の日の家の家庭にて
純錦会式の三寶餅の載せてある
その餅を二重で下白上紅であつたが紅色
の餅のおもしろい色うしてもそれ何も判
し方の比日主人の話ばば小豆粥の汁
でもをつけるのぶ錦会の式にとゆえも成
るるの感しい北の国つき莫餅も会場の錦

会式とあるまるのもの思ふて貴庭にを何も
後紀をおもるのかし獨りおもしろく思つた
のに……コンナことを書きうつて鑵を破る
出してえると成る程色小豆色でもの、唯に
あまるの砂糖味う強るきて小豆の味を没
却されて尋常の甲もるの、砂糖の味を極
めて強くしたら、茶人などの珍重するもの
るまうに、田舎のことだとうも是も知れない

○伊勢の堀内好雅とのふ人から曲亭主人宛書簡集（仮
称）一冊拝見した。この人を未知
の人だが、三村井清を仮りて刻意をとゞめた。然来
で見る、此の書簡集を馬琴が「反村」保存
元で此数十通の書簡を年代順に収めたもの
一三通の手紙が最初数十数枚まで
簡が多いが、これは北斗七星三百二十枚ばかりで五号活
字で印刷してある。篠斎と曲亭の交情その他曲亭
の記録や性癖を見るに大切な新資料である。
先ほどある人から借りて一読した。あるから
こちら抄録する。此が今北斗を得たのも縁

である、篠崎の山河を一見して堀内の手を煩はし、ことの
あるを、多湖井、時を移さず整理せと校正を頼まれし
出版したのは、北書は、僅うに四十部印刷したとの
云ふのは坊間にもトンと古書の出ないものである、今
北書の原板を或る出書屋の手に渡したと聞く
用と云ふ高値を吹て売るみである
○印度のリンガムを後ろ向きの図して寄せて来た
ものがある、大略上図のごと
く石造で水盤の中央に突
起したものがある、これを湯
桶に乗り、水盤に清水
を注ぎつけたものと、こんぐう



堂祭の神体のごとく殿堂に置き、之れを祭する
時は、植物性の油を突起したもの、弱く注く
と其の油を水盤の縁から溢れ、右方のある
口から傳って流れ出る、其の流れ出た油を器物も
経て堂のある地獄の猫に入る様なうるみ
る、北の油の量は一年に積もると莫大なる
ものと云ふ
○又て歌山湯のうてある、多書屋の
摺り本なる一束の手紙を見ると、山美時
氏書法上人氏の出版する、先年
も正義坊氏の出版(五)を一巻に纏めたもの
又ものがある、北の山美坊の廣時の新家

の世話等に、西浜町のものとなる任職に成る
北寺の家系をいまだ考へるのが西浜と家種
見傳へ可きの所の初代なる沙代なども業に
しいことの、勅書なる宝のもに出物の伝つて現
うつる、光義文家の本あつたのを、家を継来し
北条と見へる、どの寄物を文書と関係
したのに、誰の命を北条を頼むを
と云ふ寺を考る形式一通の手紙に、高野花住時代の品とある、梅
の花を去年合の書類ある、阿弥陀如来の関
係で、云ひる地蔵を元の通りに消息も北寺の
中に残へ得なる、高寺なる関係なるものあ

で一二の所に置くべきなるものなる、一も三桝三の
が出る素庵と書く紙に千紙ひある、三桝十八
文素庵四十三文筆二十一筆の時の手
紙に素庵と文筆の筆を抗弧内のことく
である、此時分の三桝の体を本件のワックリ
で乃父の業改良のしも無いのもいとあるべき
此、素庵の文筆時屋見者の前金と就て色
々心配、江戸へ出すことなどを言ひ送つたの
を新しく時屋なる禮とし送り且つ心なも
叙しなる此、無論京都なるこの所であること
えなる北寺と共寺参詣を行くとあるなる
と云ふ、時屋の心なる左の如く現めてある

何分面三年中一ハ下筋ニ降て江戸ハ此出
ゟ有しハ此ゟ出来ニ成ハバ
江戸ハ参りても　出来の都ゟ
徒の汚ハかりこゝゟ有何分ハ領史
人切腹門ゟ一文参りても御書
様ニ御ゟて後と欲ハ実ニ有難
ゟとゟ御中ニ成度ニ而ハ市ニ致
ゟ有猪具ゟ以前大人及ニ
ゟ中ニ今日ハ大人ゟ宋寺ニ参ニ
有ゟ有ゟこゝゟ千弟中ゟ
後ゟ迄ゟ迄ゟ迄ゟ迄ゟ
五月廿九日午後　暁雨

書簡大人
尚々一通　ゟ歟ゟ出ゟ
二日の21枕の中ニ山陽の樹陰草の御ニ
ゟとも報ゟる一節ゟ有
備二事出来ニ而ハ出ニ而ハ
浦ゟ而ハ四已後さゟ導ハ助手傳を
ゟ門ゟ枕ゟ枕ゟ謹慎ハ助ニ義ハ
ゟ論外ゟ参ニ
得行ニ而ゟ
者出ハ口上ニ而ハ
ゟとゟ枕ゟ
吹聽ニ而ハ

[illegible]

文中二年雜録の事あるを見たり

○近刊の日柳燕石全集を示すものあり閲に任せて翻讀す、北人(秋後梅屋と號し前年遠碑のもの)あり、死のもの余北人の注歴を考へ知らず、今集を淚み知れて其の詳を悉すを得ず、燕石、通称耕藏去藩政那珂郡模井村人、柳東の別號なり、勤王の大志を抱き幕末藩士の志士と往来し、高杉晋作の遁竄の時も北人の家に潛居すと、明治元年七月二十四日 仁和寺宮嘉彰親王北征の時燕

石記室として従ふ、翌年病に罹り八月廿日梅屋と死す享年五十四有二、宮門の遣を大援を拒者と勝ち、後四位を贈る、日本東の姓もと草薙日改めて日柳と云ふ、音四の如し、芝山の如し、芝山石碑と長す、曾て山陽詩鈔を注す、後世に出の山陽詩注こんとく燕石初著の集にの前部を載せ、芝山勤王の源流なるべき歌、梅屋と遠て碑を建て碑文を撰み梅二月遠の所うえ吉田の高橋三賓文を撰み梅崎の丸田高文撰者も有、余未だ此碑を見ず他の一見を欲すといふ

八月二十日記

詩集「北緯の花」唯一首を存す

仁和王北征于越余亦從賦此詩書

鳳詔高擎掃賊氛、桓々帝子是將軍、繡袍燦
燦九重日、錦旗翩翩三千雲、皇軍再開神
帝業、王威遠徙武尊勲、布衣措大何僥倖、奉
命轅門草檄文、

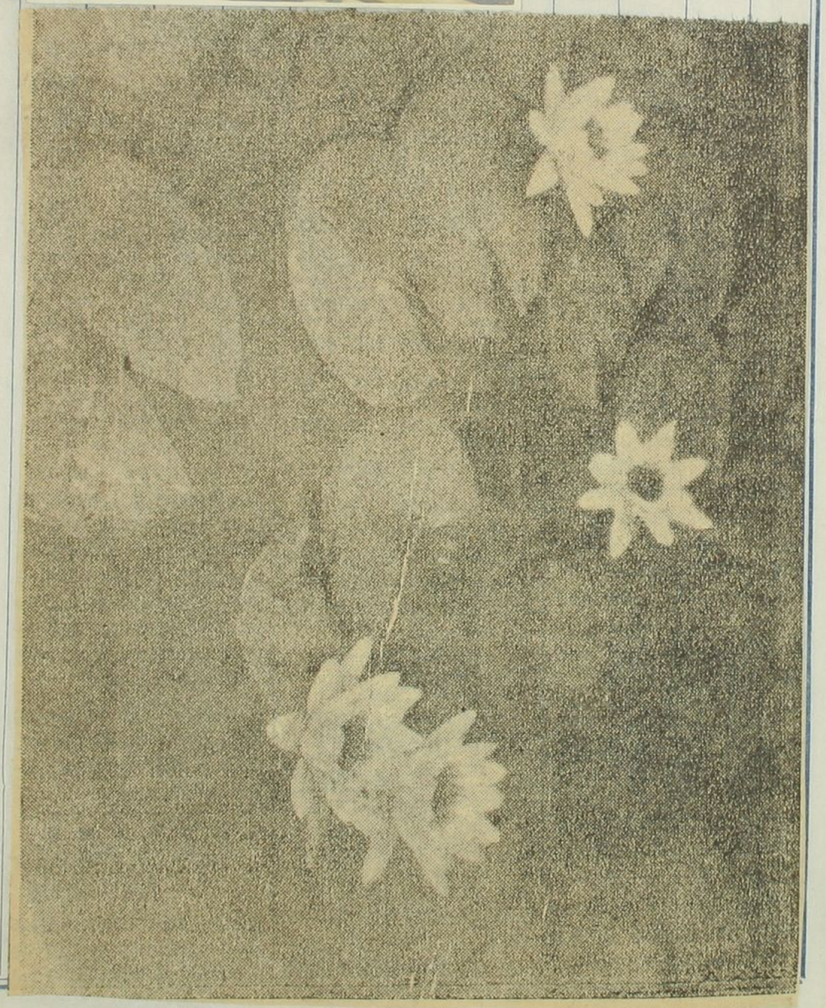
絶筆詩

錦旗已移新日東、腐夫一枕伏秋風、報未漱口遠
相拜、只禱吾王早立功

日柳生惜徒花と言ふ説ある高杉の隠れ花の美

余と吉田と
池内の
蓮

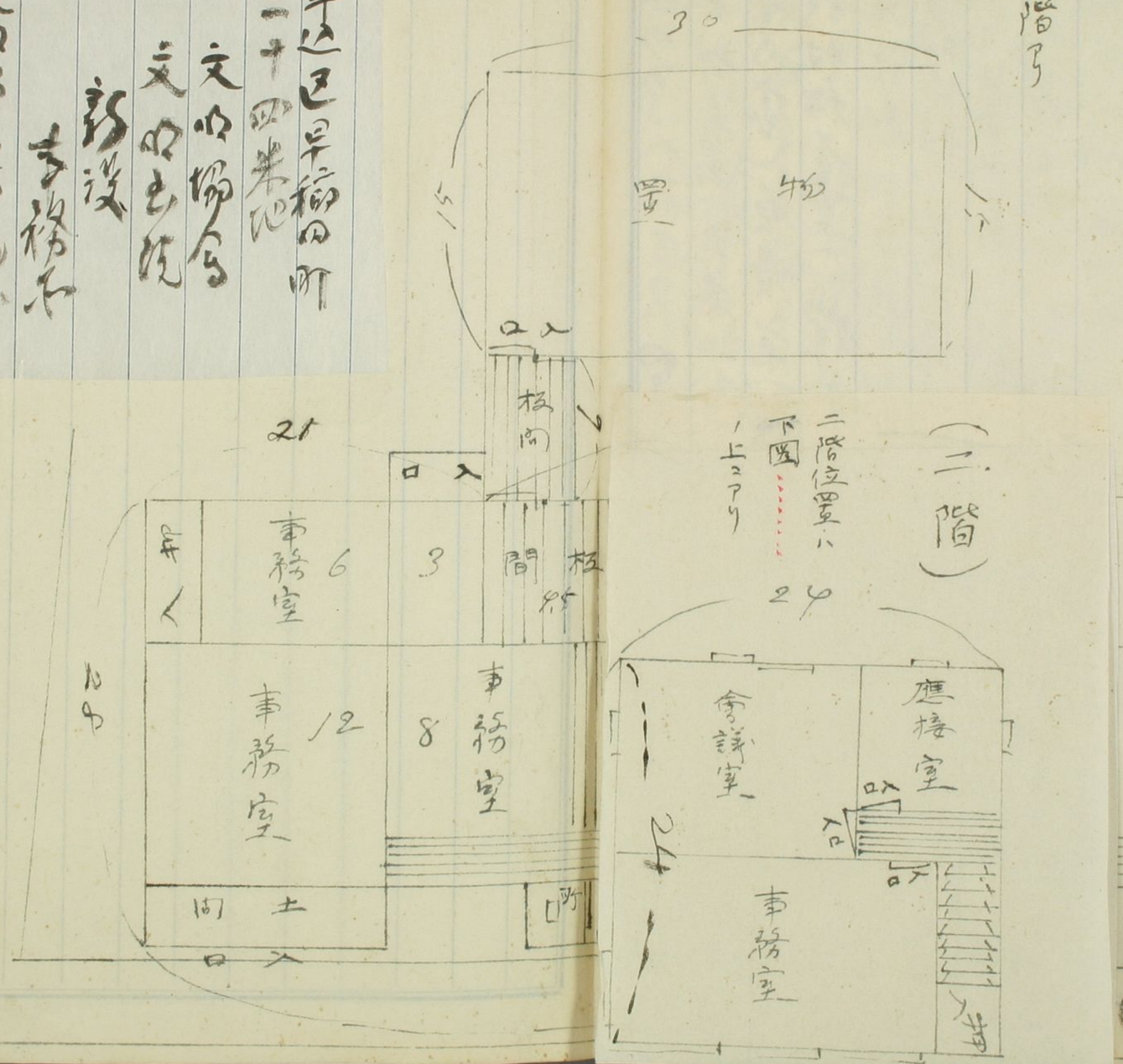
八月二十日
現撮影



○天津に在る校友十余人倉章宏氏を電信にて
[illegible]
係に[illegible]四庫全書を[illegible]
[illegible]
人に無きや[illegible]
外人の手に渡すのを[illegible]
けば未来の本の手[illegible]
無いのだ[illegible]
[illegible]
遊城[illegible]
○北支前線の[illegible]
[illegible]

[illegible]市島春（号山余）一族
井部香山（五番山人と号す）錦城女史（王村懋
[illegible]の妻）原脩齋（相馬藩の人）中川善山（名[illegible]仙
仙村松蘭士）[illegible]祖海（名大[illegible]
[illegible]郡伊米時村[illegible]人中に[illegible]村仙石樗
[illegible]寺住）等である、北内錦城女史は丈を半切
[illegible]
[illegible]
[illegible]

物置ニ二階ヲ
坪数図ニ



半坪ニ付稲田所
三十四米記

文部省令
文部省訓令

訓令

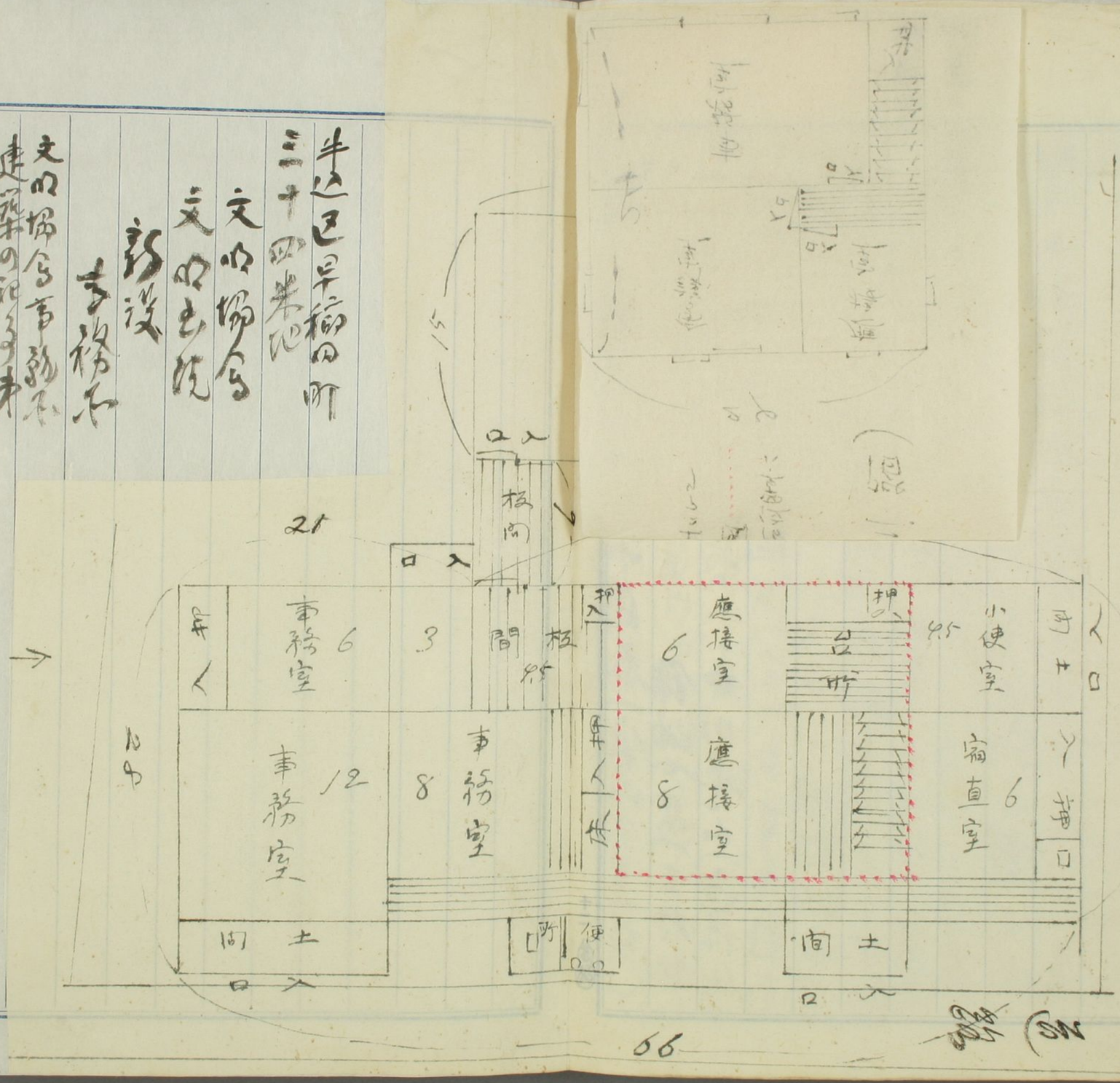
事務所

文部省令事務所
建築の記ヲ参考
六巻ニ載リ参照

半込已早稲田所
三十四坪記

文明協会
文明出版
新設
事務所

文明協会事務所
建築の記録は本
六巻に載せ参照



屏風を作ることあり今番仰せ、更らに撰き
あつめて更らに一度を心えんこの、前項山嶽のこと
を保ちて試みに目次をしるすこと左の如し

一 路客 画十切　一 菱湖 書状
一 崑山 画　一 五峯 詩書 扇
一 屏山 詩　一 魯山 詩
一 香山 詩　一 祖海 詩
一 雪樵 画 扇　一 産一 詩
一 旭堂 画　一 雪城 書
一 備南 詩
一 牧之 短冊
一 鄭南 画 扇

今夜まるまるの如し未だ二枚折を立てまる迄ら
す尚ほのこること十枚を得さる可らず、故紙を
換ふ安は三四を得んこと、　八月廿二日記
○前の曲亭の画集を寄せる伊勢の堀内
絡雄氏より拙著を出せしところ謝状を
寄せ恢し備せる樵亭の琴逸の遺筒を始
え此、此手紙を殿村伝市氏に、特去文
右二門あり人こそ此あるべ特去文
あるべ文中に琴逸に関すること
文義のるまを一切海つて毋如、素稿
逸の投石を徒投のあるる手紙なり、琴逸の
筆にあらず、自人こそ多くの書簡を投つと

が琴を琴道の上間ヲ解んとしことこの無い馬
琴ヲ関係の深い北人の出間を保存と情之す
ヲ、琴道のうを飾り頭へとことともちのこの曲
音音詞集に就て頭へんと見るを飯村藤右衛
第し北人のことをちらから見て居る、
弦姫を祝し北一条や琴道修まり浪人
ぢあるうを併し別こ印を出もうい弦音
過ぎるをみる所の琴道の弦しと時
節歌を送ることもあれば修業もあり紀之
うと奥貫の経歴を宮内七郎右衛門ある北
琴道を飯村と同姓で文学ヲ馬琴の心を
常ヲ北評しとの名北人行ある、三村供清ヲ馬

琴古商集琴道孔芸の傳ヲ伝
しをみる
琴道ハ飯村氏名ハ守義、精吉と称し尾張を
木地屋といい藤右の一族也天保二年十月
廿一日四十四歳ヲ没す、伊勢松阪日野町
真宗寺院願証寺ヲ墓ヲ、法名釋亨道ヲ
子士左ハ善久妻清源大姉右ヲ寿照童子
左側ヲ飯村精吉墓右側ヲ天保二年辛卯
十一月廿一日行年四十四歳ヲ寿安沢三
丙辰年三月廿三日、善久沢三十八年二月
十吉と号妙清大姉即琴道の妻ヲや
所著寄寄留談六冊風月後記六冊ヲ

砥石文六冊あり、

八大侍九輯の志は是等の中に樂亭琴色
は同じくこれを他に吾仙書の友伊藤氏
う弟なる宏等の砥石文をといふ
物の主の仙石なりし博士なり四十餘年
なる身故なるべきいい吾仙書の友の本
侍を見果さんとて色の繪をかりしを出羽
に武木藩より江戸に藩士書家あり伊
藤氏樂亭琴色と云ふ
馬琴の琴色と詩しことなりし中
精神と名を刻とる文右門を仙人なるや未だく
す

八月廿四日記

校正する

○又山陽の逸事を追加して愛に一行を立つ、
山陽の日本の[illegible]第子子才（隨園）と云ふ人の
徒として住ることなるべきの木[illegible]
似ず、攀柳摘花の風流似ず、その著作詩文
も通ずる似ず、時人の山陽を表と比したるも偶
然なるかの山陽自身八表を排するに餘力を剩
さるるなり、浙西六家詩動もすれば表の名も收めて
あるかの山陽の表を評するを他の五家
より甚だ高く、毫も假借する事なかりし、○全体人々
を競爭の心が燃えるものなり、利慾大刀打ち
出来ぬ所の戰陽が文人、競爭の忍も起らざい

が人に与へんとするを買けめ義が起るものゝ如し
てよいことまでも假に藉と四校とするが人情なるべし
山陽の意を評するのみ しく此義味うるいひもの、
篠崎小竹を浙西六家詩鈔の序るこれを露
骨ともいへども、何ぞ校ることを云ふてゐる、今山陽の
書後を読むを見るに、意の詩文を評論し比議論が
五則七義のそなはる、これを掠ると、山陽をも幸の時の
陶園詩話を読むを見ると、一向に真面目な
風にうつるは、めるに壮年上方に来て見ること、此詩話
自雅のもの意の年を読むに、自分
も好まるべう時流に倣ひ読まるる時或は
詩話中のことを挙げることもあるのみ、人は驚るい

て貴君は個いつ後れたるを言ふ 自分を見よ
であつて、全体宋あたりの詩家の詩話を微言清語
更言あり甚だ短くて毎に盡き易いのを恨む信ひあ
るのみ 人のうること其の備はることを求めるとなる餘
味が無い、 意を至つて
詩話を巻帙を累ねてフシダし
ものを会うてみるかこれを展ふべき
ものも無い、必竟沈帰愚を對抗を試みたのである、
沈の別裁集のあるこれを最もして此詩話を心り
四方の吟詠を網羅したが実を詩話ひき無い、沈の
別裁にて奇とすべきものはけもおのつから後
学の範とするに足る所のある、意を於ても軽薄
浮薄、徒らに人を会うて其意を我邦のまで及

[illegible]と痛く排しそのあと袁の沈[illegible]
とつく頼も[illegible]袁にしたがつく氣味もあるまいか、山
陽と袁とは千[illegible]あが[illegible]々尾[illegible]が古詩歌[illegible]を
[illegible]入れ[illegible]とつと[illegible]その本を後もとの[illegible]早
く古詩の真面目を得し、逆[illegible]に武元[illegible]古詩
の詩人をしたことすらある、袁の集を内々後もむび
[illegible]排るべきを腸に入れてすら[illegible]人う袁を
[illegible]と雖[illegible]袁を評して人を惑[illegible]
[illegible]見[illegible]袁自身[illegible]
[illegible]袁を評して恰も一[illegible]
[illegible]袁は一[illegible]

見現[illegible]天仙とくくんでいるものと[illegible]
袁自身天仙[illegible]ことを揶揄し、そして
山陽と袁を評して恰も一[illegible]の甚だ[illegible]
ものの巧みを媚態を弄して[illegible]年を[illegible]
[illegible]くくくく

書簡のうちに其文を生色こうあると、褒めてみる、そう云
ふうと思ふと亦一話しもいまもあのれ海のあの男
さあんうち碑文を拓しとうぼどうこのそんを物語
てみるとか王蘭亭の碑を見ると、果して強みを
人の焼を受けて作つたものもうちく強手な迫て術つ
れの[illegible]ばかりある、文ういくらうちも[illegible]相手なる
らあと[illegible]さて後篇[illegible]敬らもんてみるか
文の詩を[illegible]人格を混同した物ひと
あつ、とこうう抗争の氣が出没してみるこの拙さ
える、光角書後のことく後世のころよりいくら
う粉飾のあつて赤倶の告白と見るんのいうう常
況で利わ断しとう山湯堂詩者と云ふ恐らく思

ひ半ばくくるものうあ
○抱一上人が光琳の図を集めて光琳百図とれ名付
四冊本として刊行せうと誰のも知ることもあるも今も
一部を所持す、外に新版の二字を添くなる図
しる図のあることもしかは拙図ら
す獲ず、こんを二冊書ても誰のの模ひしこの
を聞きも見ること巻首に五枚ことこと沼田
行村の海花の序あり文政の年行村の
の為もしも図られ多くあるを撰字を
なる粉本を花集の上木もしあることを
ものり得ず、行村の作れのもこんうう初めを見る
を得ず、青花も書もの抱一に似ること

巻尾に[illegible]村の人静子堤西（[illegible]）で時作の
国歌を添加のしなかよりを録し[illegible]名の歌
あり抱一の歌まし[illegible]
こ助けとなるこの世　八月廿七日記
口人間の眼が病んでも点変態に出来ないとしても
餓う実況をことごとのないう、隠れた眼の[illegible]
迷がヒドク善悪[illegible]
ドンナ人間のものが[illegible]
であらうと[illegible]
[illegible]人を欲くこの世の生るのひ、現[illegible]
[illegible]ん不思議もない[illegible]

十二

逃げ水……地鏡

◇自然界の奇現象

炎熱の劇しい地方の廣い裸地にはよく見られる

理學博士　藤原咲平

夫木集
武蔵野にありといふなるにげ水の逃げかくれても世をわたるかな　俊頼

宋文帝元嘉二十五年冬、青州城南望見地中、有水如影、謂之地鏡、唐神龍二年、二月壬戌洛陽城東七里、地色如水樹木車馬歴歴見影、漸移至都（談叢）

遠くすばかり、滿目只之れ沙漠に陽まれたサワラ沙漠の旅行者が、炎熱の太陽の下にふと遠くたる綠に包まれた湖畔や島を見出した時、歡喜の聲を擧げて突進せざるを得ない、俄しいくら行つても行つても湖水に近付かない果てはこちらの進むに從つて湖水は逃げて行く事を見出し、遂には路に迷うて餓と渴きの爲に沙場の鬼となる者もある。かゝる例は、あの沙漠を駱駝と共に旅した人達の殆どが常に警戒を怠らない所で湖水の様な即ち蜃水面は日中にさへなれば常に見られ勝のものである。是が所謂ミラージの現象であつて、我國では是を盛氣樓と云ふ人もあるが、地鏡又は蜃水面の現象と云ふ可きものである。

此の現象は炎熱の激しい地方では裸地があれば大概は注意して居ればどうにか見る機會がある。此ミラーヂ（Mirage）と云ふ言葉は殆ど世界の共通語になつてゐる。ナポレオンが嘗てエヂプトに遠征の際、地鏡の現象に對し、モンヂの名づけたもので、此の時の現象は最も有名である、此の現象は、砂漠の地面が日射の爲に溫度が上り下層の空氣が熱で上層が密な爲に光の反映を起して、一見すると丸で地面に水溜りがあるかの樣に見える現象である、（中學や師範學校の教科書には之れを蜃氣樓と名づけて居るものが多いが、實は不適當である）此の外に有名なのは、ヴ井ンス（Vienne）の現象といふのがある、日本語で空中蜃氣樓の現象といふべきもので、昔てヴ井ンスなる人がドーヴアー海峡で觀察以來有名になつた、之は海面が冷たくて上層に溫度の高い空氣のあつた場合、光りが上層で反映して見えるので、物象が逆さになつてゐる。此の二つの現象は空氣層が水平に近く出來てゐるので反映した像が、實物に餘程近いものが見え且場合にはつきり見える、此の他同種の現象のイタリアのメッシナ海等で見へるフアタモルガナ（Fata Morgana）がある、その意味はモルガナのお化と言ふべきもので、その特徴は映像が變幻する、恐らく之が日本や支那で昔から謂ふ所の蜃氣樓と匹敵するものから謂しい、スコラスピーと云ふ人が北極探檢をした時度々蜃氣樓的現象を見た、ある部分はヴ井ンスの現象で、ある部分はフアタモルガナに類したものらしい。

支那では此種の現象に對して海市、蜃氣樓、蜃樓、地鏡、水影等の種々な名が附せられた、而して海市、山市、蜃氣樓、蜃樓の四つはフアタモルガナと同類の現象で地鏡、水影は共にヴフリカのミラーヂと同現象である。

日本では富山灣で有名な蜃氣樓があつて昔は此地方では是を喜見城と言つたものである、是は佛語から來たもので印度乾闥婆城と言ふのを譯して支那で喜見城といふので是を昔は使つてゐた、キキン城などゝ訳つて云うた人もあつた、一般が蜃氣樓と言ひ初めたのは明治になつてから普通の本に有る説明では、どうしても説明が出來ないので大正六年頃、氣象臺から私と、伏木測候所の大森所長とが共同して調査し、その結果是は學校の教科書に書いてある所謂蜃氣樓と見掛けから既にちがつたもので大氣の層の形が水平でなく、レンズの如く曲面をなしてゐる爲めに出來る事を發見した、レンズの作用をする爲めに物が其儘に見えないで形を變へて見えるのでたとへば漁船が極めて小さく點在してゐるのが、變形して松林に見えたり或は城の樣に見えたりする、此の現象が所謂蜃氣樓の感じを與へる。

此の外に日本には『武藏野の逃水』と言ふ現象があつた、是は研究の結果地鏡の現象と言ふ事がわかつた弘法大師の『性靈集』といふ詩があるが、之には明かに是は物理的なもので、只馬鹿者が之を見て迷ひ、水の無いのをあると思つて其影を追ひかける」との意味が歌つてある、千年の昔にも大腦の性質は日本人にもわかつてゐたのである。故に事新しく驚く程の事ではないが、併し支那でも西洋でも怪奇現象に見えたりする、此の現象が所謂蜃氣樓の感じを與へる。

句会び物ばとそくなりまとあるとも
遊覧の模写の幻影のみ実況くぬるも限らぬ
ことなる人間の眼八幸にも日完成の
来遠構造と眼の誤(エリユージョン)を多くの
例で、それを多くの場合偉大の角度の差
で、物体の位置をもとめ聊うるつて見くの模
写例はかりなるべい

八月廿七日記

○図書館協会で図書館と読書の標語を
紹介び募集を試み、東京市の社会局を托
して電車と数の間に掲示をした結果
まだ少切り物の日あるのに最早五千
位も無ひ込んで来てみるさそとんなのがあると

見ると、実に幼稚なものだ。実とお伝しまるまで、
タワイもないものである。別段こんなものを一人前の応募の
資格をあるまいと思ふから、すべてコンナ校歌集
の結果の内容を、元と似れば、当選を
ある場合の作用で内々作るようなものだが、マサ
カ此校なる訳もあるまい。固より彼とまるものも
記解とす標準とまることもあらん程度のものの
反響の端をカキ散すことを見るこうの方
い、見意おもの結果のあるものの応募を試みるもの
結果は、当試みない所以を固より閉印
してあることもある。此の標準の募集を統合
何る得る所ありまいか、かくも固も

何うまでも我々の注意を受けてみたいことは文の
証拠を握ることを出来ない。八月廿七日記
○学の残暑も甚だ厳しく感じ
外出も懶く書を数日の書斎や昼寝
や回想をもを風入れの寄せ
を貪して見ると、学ぶそコンナ折りの現出
て特別の取扱をする校るものが、いろいろ今
家庭の無いこと取想い起すと、愛情の
いうくと記して来る。十数年前芭蕉集
見れば二三の巻の出商の内容
あるべく無いとが、えを今の長短を校へる
友人の厚意で引取ってもらいたいのであるから、敢

て愛惜の念も絶えないが、それぞれの意味もあり、又強ち今の代になって必要も無いとは言へず、山カト手離しがたきものも多く、書籍の念の去り難いものがいくらもある、殊に白鳳堂の蔵書、親戚の田中納言の蔵書、紀州の井白石の書簡（小倉氏所蔵）を双比の、蘇井氏の所蔵の名家十数通の書簡をもつて比較本比の、柏木探古が蔵書も捨し難しとの比の、高野の墨蹟百本ばかりの業平の、大名家の墨蹟五十巻なども皆手離すに忍び難いものを、いろいろの場合ソカト手離しとのみ残念に堪へぬ、北のそつれとまくの白鳳

既の如きも国宝とすべきものあり、それを例へば、山岡家（号次郎）の田舎川掌是抄と称して友人小川氏に譲つたのを、あと心得まじあつた、今家蔵のものと元和の頃に出来たものとを比較すると、出来ばえ、もとうとしたものの方が家を異にするが、墨蹟、孫籍、のくるい、書簡、山岡のお八格別、其ハ、さいかいさを眼目とする手離しの内にあるとの事、秋の仕末、今更死人の齢を算することくらべ、二郎の死の齢を京、伯父と伯母と比べても北斗蔵を禁じ得ぬ、八月廿七の録

○此秋国史編纂場の評議員を奉上東洋大学の

[illegible]

入札消息

東京入札の革命か

七枚札を一枚に

前號に記した通り、今年上半期の東京に於ける書畫骨董の賣立總額は、實に六百四十八萬圓の多きに達した、處が此處に久しい間の問題であつた、東京の賣立の方法である七枚札制度に對し、謂はゆる世間の荷主株が不服を唱へ出し、大阪や京都が已に五年も前から實行してゐる一枚札の制度に見習つて、公明に正確にやらなければならぬと、其の形勢はなか〳〵侮り難いものである。

尤も、この數札制は幼稚な時代遲れのやり方である事は、東京の少し眼識のある骨董商連は十分に承知もし、且つその習慣を何とか改めやうと、かなり眞面目になつて手をつけ始めてゐたやうであつたが、何にせよ商取引に對する觀念の發達の遲い東京の事とて、其の實現の可能性を持たずにゐた。書畫の賣立が殆ど毎週一度乃至二度（八月は休み）位づゝは必ず催される今日に於て、この事はもう他の重要商品の取引のそれと色合を同じくし、單に數奇者の愛玩品である事のみに其の天　を狹めてゐない。それやこれやからこの賣立の土臺をなす入札法に就き、世間が騷ぎ出し、その公正を求めるに至つたものと解される。

七枚札弊害の例

右に就てその公正を求める理由とする所を聞くと、大阪や京都のやうに、一枚札で品の運命をきめると云ふ事であれば、自ら品物に値段の標準も出來、安い物高い物、おの〳〵その位置に落付くが、東京のやうに七枚札であると、せり合ひがなければ途方もない値を吹き、せり合ひが激しければ途方もない値減にされてしまふ。從つて金の必要度の比較的低い者の入札、例へばこの間の酒井家の大賣立の如き底値百六七萬圓のものが、せり合はされて倍額以上の二百三十一萬圓となり、早川千吉郎氏遺品なども精々百萬圓と踏んだのが百五十萬圓近い上り高を見せ、人氣さへ立てば金が欲しくてたまらない程でも、荷主が法外の優けもすれば、反對に何とかしてあせる側の賣手に、人氣が寄らねば千圓は問造ひないと云ふ品が三百圓にもならないで、全く叩きこなされて哀れな最後をとめると云ふ仕末で、玄人でも全く値段の標準をつけかねるのである。

又、これを買ふ側、卽ちお客から云はせると、買値の見當がつかぬ事で近い適例が酒井伯の時に出た大名物『富山茶入』を東京方面好者中の大立物、横濱の原富太郎氏が五萬圓までと注文したのを、梅澤、中村、戸田の三人の手で、七枚札のせり合ひから、どゞ九萬圓に落してしまつたが、原氏は飛んでもない事だとばかりで、どうしても受取らうとせず、東京美術倶樂部を代表して、川部專務が事情の釋明に行くと云ふやうな現實暴露の悲哀を演じたのも、この不正な七枚札制の招いた當然の歸結に外ならぬ。而して斯る例は今迄世間に枚擧に遑ない程ある。それでこの舊弊入札法を破壞しないで、いつ迄も現狀の儘では、どんな無鑑識な者でも平氣で商買が出來、若い連中は研究心の不足から安易な道に走り、七枚入れゝば〳〵と云ふやうな不眞面目な生温い態度のために、骨董商の眼識は日に日に墮落して行く傾向が著るしい。すでに入札と云ふからには、何としても一枚札の一本勝負で競爭するのが正道である。

京阪では、既に五年程前に一枚札を斷行してゐる。大阪では開札一切の事務は書記に一任し、荷主を立會せ、京都では翌朝監査役が札箱を一々嚴重に調べて不正を取締つてゐる。從つて先頃の京都で竹邨畫伯遺品賣立の際、札元一人の不正事實が發覺して、三ケ月の取引中止處分を行ふやうな英斷も出來るのである。それを思ふと東京のは、荷主を札場に入れさせないで、札を札元が勝手に開け、中には札主に依つて七枚のところを八枚も九枚も入れるやうな不埒な事をする。實に社會政策の見地から云つても、不合理極まるものである。又東京では荷主は賣上の二割に目錄代を拂はせられ、どうして自分の藏品が賣られるものか、全く分らないでしまふと云ふやうな不完不備無信用な遣り方であるが、今やこの宿弊を一掃せよとの熱叫は、賣手買手はもとより、商人仲間にても、漸次に眞劍味を加へ輿論にまでなりつゝあるから、近く一革命起るであらう。

要するに、數札入札はいろ〳〵の惡弊を伴ふものであることは周知の事實であるが、實際は一枚札でも可なり煩雜な手數と時間と多大の費用とがかゝるので、若しこれを理想的に行はうとするには糶賣りにするのが一番可い。それは糶賣は第一に煩雜な手數がなく、賣買は極めて短時間に行はれ、費用も半分にて足り、其の上いよ〳〵落札といふ際、入數札などの如くその價格に曖昧な手段を用ゐる餘地がなく、又競爭者の入札値をお互に探り合ふ結果、案外高額の入れ値をして高い物を買ふ必要もないから、賣手も買手も氣持よく賣買行爲を履行し得て最も現代的であると信ずる。

（大藏仙人學）

田家の豪やかなる入れとなるを考へて家うつしの費用を考へ
ちちとの手前いろいろ撤しとらるふ
と前年忠義をしたこともあり、それ霊魂をしてこの
つとと思ひのあ文体都
怒り出しとの無理をそ、何かいろいろの類を
選しとみるのくの、それを振て
ある時機の妻場を約束すると言時
と語つたが、あまりの男だある、
東洋大学の創立者井上円了と自分の同窓で
ある、死するのし前副島の墓碑を撰する
紀念とと田及る地を需められとのうち、五く

まいとやつとこの間もなく強しと、高潔の流し
の撰んだ酒う飲の酒を飲むと死的と
早めとと云ふとみとの、朝ま酒を飲む故なる
つとと云ふのを言ふ、薬を家人と出
講演を一年を考へ、その為を収入のあつと
とあり利る先くく押金を求めるあるを断
人府で、このね入れ可ありとの、因り
のあり口を住を非難さんと、それをドうか
とふと世話人を潤筆の半額を渡すと
云ふ世界的の考方をやつと、すべて出田中
の収入を一部を出し一部を拠谷
出の任を、先て一部を自分を取つとと

いふ、隨分仮名づかひ、そんなことをいろ
〻晩年に誤解もあつたに違ひない、たとへば
り條紀をなぜやはり理化こう境界とい
相違こうある、因うを微白古郡酒井出
て東本願寺の僧ひあるを南部と云ひ
のを地名こう附けたのであるが、大学用字解
まを漢語を仏つたに[illegible]訪ふて
ぬまを遠あるとなる、拙悪論まるを迂
と云ふに、話も平友も持のまを狂詩の
ものを矢鱈に吐出したとこ云ふ（月出雲記）
○さくら秋内ふかい婢と共に嵐猪をやつて家鶏
のいろを指を噛まれた後、傷を微のび出血も無い位

であつたが、第一を雪の注射あつの坂上弘義宅
迄をうけて○自動車で五〻来る扶ると頼人に
一時間位も来ないうちに氣を探んと みると、あ
ある準備をし助手手
ぬる手附それにのもあつた、坂上りをあつをそれ
と氣を探むる度ぬ、毒を体内を接戦ままを
一週間位こうると云ふを、狼狽したのを内ら
笑ひをを得ないうちに、坂上のをあのを行き
ぬ度急の手術をすまを丈をよりいが、前金を四
ぬうを 六〇六錠の注射を安する、用意をし
て来たこうを、五こ注射こ、えりこうをこうを、助手
を北の薬剤を入れた小サナ硝子の瓶に入れた

雪白の粉ハ入つてゐるものを元の壺に、こんう即ち六の六號で、真空の器に入れてある、器の上部を鑢で引いて、口をあけ、藥劑をチユーブの中に入れて来た処無色の流動物の中に投じ、之を換する

○矢張無色透明なる合のあるも混濁の色を呈すること云ふ、早速注射器を此の混濁体を全部注射器に移し、こくう、ナグラムの分量を可なり多くなるものでこんこの注射器を目標に

しこと云ふこと、之を手脚に助手が注射し、手脚を縛るも巧妙であつた、あとは投上こまくに注射うと投じてある注射液を溶かしてこれを皮膚に害を生ずる、アトテ丸を生ずる

ちも体温こまくも来るが、注射の巧拙もよると云ふ所、矢張微毒に似たるものあると云ふ、六の六號は鼠菌に効ありと少之れ

○矢張微毒に似たるものあると云ふ、六の六號

と云ふこと、アヒサンを出すとなる、アヒサンを出すとなる、ものを危険な藥剤であるが、血液に入つて納節

○注射の巧拙もよると云ふ

なる様のもつて人獣に八宮をさめと云ふこと

○注射後別に異現もなく、溶液の一滴なる

一回の注射を要すること云ふこと、六の六號

○六の六號

と云ふ外少のもくろい注射藥の色を入つと

○注射藥の色を入つと

のもこんこの姿である

八月廿八日記

○日本の洋裝本の板面に紙抗力を無くバ

うくとなるのが、圓也の一尼である、必竟紙の粗

略であるこうしてあるとこの辞書などを見て
る様の白酒をつくる人は世間略上耐久を厳の
で、一二年も経ぬ内に二年も三年も買ひとる為の
又、ほさと紫本を粗略にする極ることもある、
志うし全体糊このようなるい、何ゴる糊の九
年間を改めると云ふ、同人中此を研究して
ようく造りうる、蔵糊うす一日びある、そんを
誰れも無めつくことも有るが、生姜をすりま
ぜるを来ることう一層年間まする秘訣と
云ふ此、或るその言の如くもあるらうが、カビを
此糊ひを防ぎ得るは、自然地性の糊を根而
しカビまた防禦し得る工風うるひめ出来

本術は完全ひるの

八月十日記

○郷人山田恭爲の都市問題を研究してみる、その
言ふ所の概要を挙げて見ると

世界の面積三四のひも都市は人口の集積地である、
政治経済ひも産業利益ひも人口一万以上を有する
を都市とすると全国人口の七割八厘人と都市に
集つて居る、英吉利の如きは人口の八割方都会に
集まつて居る、農業国ひる我国に於ても大
正二年末の人口統計に依ると、全人口の一割六分
市及びと集まつて居る、之れで町の人口を合す
ると全国人の三割三分に当る、大正九年の国勢
調査に依れば、市及びの人口は約一千万で、全

四人口の約一割八分に当り、市区及町の人口約二千七十万程で、全四人口の約三割七分に当り、年と共に増加の趨勢を示す。

世界に於ける人口密度の最も大きなる国で、市街面積千坪の割合に就ては二十人、即一人当り約八坪、伯林が其次ぎ居るは、一人当り約九坪、我東京は世界の第三位を占め、千坪当り九十八人、即ち一人当り十坪。大阪は第四位で八十五人、京都の如き比較的人口密度の少さいと思はるる所でも七十一人、市六位となつてゐる。以上は市の面積に割当てたる、宅地に割当てたる場合に就ても東京は第八十三位、殊に京橋区の如きは三万五千一人、即ち一人当り僅に三坪三合、大阪も宅地面積千坪に対し二万二千六人、其東区が二万五千一人、即ち一人当り四坪。

以上は山間僻地等を除き、都会と年を追ひて人口の益々集まるのを統計的に示すものにて、これに引続き其の場所を生ずるのを○のみならず思ふに、農民が新天地を求めて、時勢の風潮を煽られ、地方の若き者の間に、うまく場所に飛込んで、殿と都会に移ることを願ふ。畢竟人口の多く、所謂すれも都会にまつ〳〵集まる計りである。度々陸つて

為政家の考へ方を拂ひ除くことゝ都会の
弱點の[illegible]任を[illegible]んある、市長の責任がある意味で特
に緊張大任らしも重いと云ふのも、都会の住民が悪
くなれば所も悪くなる國民の大部分が悪化すると
同じ[illegible]ことゝなるこゝに日本国民人口の半を東京
に集中して世界の第三位を誇るとは云へ、都市の
体面を保つる者等でまづ御話しまつる迄
なるべき悪弊を改善し一面こゝに今の有様をドンナ事
も出来る、全部破壊して見た所が始めてあ
る英の新動は世界中有る氣旋を大都と云ふ
もの多い人々となるべきとかすることも出来ぬと

云はれてゐる、英都とも言ふ當て全市面積の半
羅つた時も思ひ切つて改善策を断行すれば今
日の行詰りは無つたであらうに、そこまで後
悔を先きを立てゝ、日本も之れを鏡とする所のこの新動の都会の現状で
ある

英吉利は近世都市計畫に於て最も遅れた國でありましたが、千九百九年に制定した都市計畫法に對して千九百十九年に大改正を加へまして、住宅政策と共に大いに積極的方針を執るやうになりまして、人口二萬以上の都市に對しては、都市計畫法を強制するやうなことになつたのであります。其首都の倫敦府は人口約四百五十萬を有して居り、大倫敦の人口は約七百五十萬あるのであります。大倫敦と申しますると云ふと、大體に於て倫敦の都市計畫區域を示して居るのであります。倫敦の町は皆さんも御存じの通りに、街路の系統も全く亂雜でありまして、一定の計畫の下に造られたものではないのであります。其幅員の如きも比較的狭い爲めに、交通の混雜は實に名狀すべからざるやうな狀態にあるのであります。殊に停車場が四方に散在して居りますることが、貨物及旅客の交通上非常なる混雜を來たす所の原因となつて居るのであります。而も街路の兩側には何れも永久的の建築物でありますため、極く小規模の街路改良工事と雖も、之を實行すると云ふことは中々困難のやうな狀況に見らるゝのであります。從つて市内に於きましては、巴里とか伯林に見るやうな遊園街とか或は廣場と云ふやうなものは殆ど無いのでありまして、市營電車の如きも路面が狭い爲めに市の中心部には殆ど敷設されて居らぬので、大部分の電車は市の場末と郊外に有るのであります。それでありますからして、市内の交通とし

ては、主として乗合自動車と地下鐵道に依つて居るのであります。倫敦は千六百六十六年に火災がありまして殆ど全部が焼けたのでありますが、其の當時クリストツファー・レンと云ふ人が、其の復舊に完全な計畫を樹てたのでありますが、之れが色々の方面の問題になつた爲めに到頭實行することが出來ぬことになりまして、倫敦市民は只今非常に後悔をして居ると云ふやうな次第であります。

元を佛國巴里の理想的に出來てゐるのと較べると、豪
天爵豪富なる者(貴族)の住居、勿論巴里の都市改造
を見て、之を模倣し、三十數年の昔、交通その他萬般の
事業を一城郭と心得、天下の都と
日本人も先輩にも家を一城郭と心得、天下の都と
どうあるべきかの根本の意味もしらぬ者ばかりで
ある。都市の改善を叫ぶ者でも、都市の改善を叫ぶ者
すらも、住宅の改善を叫ぶ者すらも、衛生設備

う行届いた全市を疫病で滅亡することもある火
防設備を充分でなければ一度の焔の如き全市
を焼き盡くすことも出來る、交通の自在ひらけぬ高
等の事業なども、貧者の住居の改善の如きも、都市の改善
の謀回ひとしく利益の為めである自分の子
孫の繁栄を祈ることを辞する者もあるまい
日本のごとく道路も田圃のごとく
糞尿を城壁の流し、ひらき溝、電氣を
時と放置し、電車を
溝んで交る)に停滞を来し、第二番不整
頓を窮まること規模の如くして
再び

泥濘
汚く

激増することなりしを、これを寒心すべきことなりとなし、
首府をはじめ諸藩の相ひ競ひ、言うて又罪悪の
中起ひ強くることを思ハしむ、都市改革
といふ有形的のことをのみ言ふのみにあらず
勿論なり

○本年（大正十二年）一月から購入の図書の内
住本と見るべきものを住本目録に載せハ
ケ月を経て（九、最早十月末になるから、一寸ソ
を心つて見ると二万五部で分数すると左のごと
くなる

一	史傳	八	
一	地誌	十四	
一	本草	十二	
一	和歌	十三	
一	經子	九	
一	類聚	七	
一	詩文	十五	
一	書畫	二六	
一	金石	二二	
一	戯曲	二十二	
一	抄傳	四	
一	雑	五一	

書畫の内八枚は内藤氏の所蔵
外に書畫十幅ありたり

北清の国ハ傳を標榜せずして、本ともうるに、傳をもて論ずる
ると一部百冊位のものもあり、亦珍本とハいへ
ひ難きも落葉本とする或を活字本にも稀数の
ものを収めたるあり、日々●進の勢にて進々かるへ、これを進の義も傳ハり、住本目
録も本年のを三冊用ひあることなり、ヤタラに

今日の書が得られずして書物のみ多く市場に現はれたるの結果なるべし　八月廿八日記

○服部耕石氏印一顆を贈る、紫檀材にて鈕に「長樂永昌」の四字を刻してあり、先々一のたりの刻なり、固者用とすべき顆、印戮なる如し、

耕石氏を解して菓子屋と為す人あり、耕石の菓子の店名は一切代を書かず其の集まるを不の菓子の商標七百に値すと云ふ

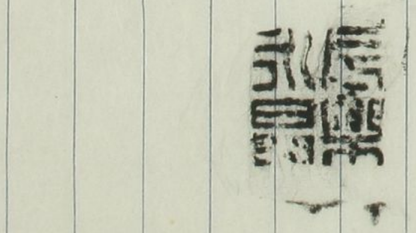
いろ〳〵名物の流しを交ぜるあるおもしろく感じたるなり

○印の形の英鐫

耕石如是

癸亥孟秋矣帝
獨逸國奏刀鐘源
志異抵産右一枝刻
氏章以呈
春城先生指下賜先
生笑正章甚

耕石　服部



形も味もよしと云へり、又京都の祇園に興
寺御と寺号を寺院を第一とする毒殺性を第一とする
菓子屋あり、その響くに、のような握り飯
に似たる道明寺の餅を入れたるなる
風にして豆腐の田楽に擬したる串さし
の菓子を用ひ、なるものを用ひ、器の蓋
また菓子屋の形のものを用ひ、菓
子をもて手を提げ日得る様なものあり好
のものなりと云ふ、

服部耕石の話しの中に例八山風雪の墓こうの話木
馬なりの菓子あるものを前年外に稿し
に美墓碑る古梅う一株あり之祝ち

なりの古るひうもる、本幹ハ腐朽しなう、
傍らに出に新生が有り直径五寸もあり之も
数年の年数を経たるもの、墓を稿する新
なる梅を元樹ことなるなり、その枝び
印枝を心り風雪梅の格印を枝に接して
例八のなるを一時多く印を刷のことの
ものと云ふを安き自分の一顆目刻を伝新
に井上関氏う例時をやるこうなる
時なんなるひあるを因に云ふ、風雪のの
八人う存在しておるこの、唯に見のの
ちの淡路なるあるを業者を響んのる、
その響く業の風雪」と云ふ銘のもあ

そもそも番茶ひとあるとそうおもしろい
百姓の與兵衛すしの家で祇園の茶屋の前と
すし屋を出したるは[illegible]ご飯へび喜うそれ
食道楽ひとあるく喰ひ廻りうて出るくいつも
その時ふと判取帳を腰と帯び財布を
懐へと自己家の[illegible]判元帳と帳元を
ちょうも仕切利を押させるのが例である
此男すしをみかを握り頼る巧者ひ
マグロのすしワサビを入れ入れ
ないかこう通ひとこの味ふるもの新鮮
ふ肉ふる辛味いうないかこうよい酒のひ
北者ふる四品ふ美うなる文化酒を出さ

十二

ひとそもそも花屋ふる　八月廿日記
○市河三陽ふる宮ひふる墨海とこの旅行を
近頃徽尾寛治朱ふる関係あるふるのみを載
世ふ光の旅行徽の出来ふるものふる
ふ光ふ僧月仏ふ米屋の旅ふる時拝石
の図を好ふるふる日ふことと
ふ[illegible]隨筆ふ「茶伝抄」と云
く記しあり云くふ金ふ畫ふ八年日ふと
異ふる若大井川ふ渡ふ清ふ
二十ふ清ふ清ふ旅ふるふ
人の往来ふ許ふ
ふ茶共似顔をふ

福島彌兵衛君藏

畫も出でし畫を人あるをいづれも是の顔
あるとはなしけるとあり、北の白雪の如く
人心宮生如印の色宮を言を為る様の見あり、菜の
の人物画こと見合人物をもとは米庵時代に人の
言ひしこと、北の一流なるも推せらる、茅の山素
（き月仙自方の言ふ所米庵に就て北を学
く所也

八月三十日記

大震災餘録　大正十二年十月二日起筆

九月一日の大震災後既に三十日を経たれど、家の復舊と
怪殺されいつらと羅災者合せ何るも手まつ〻すれば、此間
偉なる日誌を録しなるべし、但し震後十日間程は日誌
すら録することうあり、偉なる手帳に覚書を可なる
のみなるべし、それを辿りて日誌を作りなるべし十一十二の日
まで再後を命ぜる録し、三十年間継続しなる起居注
こゝに連續を得なり、平生を毎の執行を録するの
きさること、①北の大震災の就ても可成細目をつとめ、家の
のこと殊に後舊修理の指紙、新し紙の重ねる記事
も摘録をつめなり、今北の餘録を第三まるの高日
誌を録しとることとも重複をなるも有益の役へなり、

大正十二年十月五日誌す

大正十二年九月一日午前十一時五十八分突如として大激震を帝都を襲ひ全滅に帰し、一世紀間積成の文化を一変に消滅せしめたり、激震の地区は神奈川県に連亘し横浜は東京よりも烈しく、鎌倉其他海岸部の別荘地も亦猛烈を極めたり、

自分も激震の際大隈会館の大書院に立ち居り西洋式の食卓に就き半腰くと同時に烈しき上下動に襲はるるや倉皇其儘に駆け下り廊下を辿り大地を院に亀裂を示し、地上の動揺を停止を許さざる程なり、当院の大屋根は前の面ちんと恐るべきものなれども幸ひ何ともなく済んだ、又動の回数は更に猛烈と未だかつて経験したことを感じ法衣とともに

庭園の山に馳せ上りて見れば、四五の大樹を倒れんばかりの金属製の大燈籠は既に地上に陥ちて破壊し大仏像も亦基座を離れて地上に落ちあるを見たり、間もなく揺り返しは猛烈に来りたれど初震よりも弱く、されども立陵の全体が動く様なる感せられたり、

自分は平素地震を恐るること甚しく、地震と聞くと大の嫌者なるも、外に出づるが例なれども、此度の激震の如きを為すべき経験せざりしなれば、帝都を全滅に帰する程度のものとは思はざりし、最初芝生に馳せ出でたる時は何等の事を想像せざりしなれども、漸やく山上の建物の破壊しつつあるを見て、驚愕を取りしも、尚ほ此地震の銀世界の本格的

の大建築を一齊に破壊し去るものとも思はざりし、忽ちにして
早大の應用化学の実験室なる人災の起るを見、校員を馳せ
来り大講堂の崩壊を報し、今後の土蔵二個も亦崩壊
すと云ふを聞き、都下の被害の絶大なるべきを豫期せり、
然るに自分の豫期なりしも被害を或る程度大なりし、恐らく何人の
想像なりしも大なりしなるべし、何んとなれば火災を震災の倍
伴とは云ひ、元来煉化の家の彼んなる如く震見火災
焼くずとは何人も想像の及ばざりし不幸なるかな也、田保し考へ
て見れば洋風家屋なる大なる震災に耐ゆるや否やを初めて
の試験なるべし、何なれば西洋に依頼する我邦人も亦絶
対脆弱とは想ひ到らざりしなり、一時を通じて往
来も杜絶市都の間なる一区を異にすれば当事情な

ども、数千戸のごとき初めも死者一番多く記せしもあるしが、何
人を問ふ本不被時廟跡に逃雅者の情死せしものなりけ
ども四箇所千の多きを及び、何なる惨像の上の出ひなり、
火災を初の八十八個所なる起りなりと報せられ後なるを二十
数箇所なりと確報され、山の手数区を除くの外悉く焦土と
なりて焦土となり本所深川の情未だ全滅に向し、人
命の損害なる十万に上り、負傷者莫大なる、損害なる億
万上なりと云ふ、之を数閉に比するに一千年の間の死者を生
し、都会全滅と云ふ惨状は世界なる国の歴史も無き所惨
なる数閉なるも更に次上なり、あ政の震災禄の災震
度を今次の震災とどの差あるを知らざるも、さるべき人の
多傷家屋の元来財産の減却のなる別産比較とな

ものなり、今次の大地震災を我邦有史以来の惨禍とす、為
く世界のレコードなるべきものなるべくして
果て政治の新氣運に刺戟し参加せしめたるもの
花のごとき一つなるべく、日本に革命ありしとも
云ふべきことも無るべし皇室を二十年年年程の間の
大なる件と接着せる天変地妖の大なるものなり
ある、況しかるあり格のことと実後し目睹するを
いと仕合とする類を現ぜざるべからず、皇室も仕合
なるべきものなるべし一身死活の境に立つたること
いかに如何ばかりなるべし
一生涯の忘れ難きものなるべし
一概に西洋の風に倣つた維新後の有形的文化も甚だ

敢て見るべき敢の間に北の大天災に伴れ西洋に多く
見る日本の如き火山国に新西の天災と過つた其の結果
あ西政の若時なるも空前の後を感ぜしめ、まち何ら
とあと断あるべき新電ひあるべし、交通社絡ひある火災に
つるもの道う利益、活潑をみるべき無いとの故ひある電
線に於ける生じて電化うつる、自然を開果ひ最早
やはり式のテニカも蝋燭も無い、電車うを通ひある蒸
道もメテわくひある、何ぞうも機械器械をうつもの
時るこの寿の一時の破壊をもて足るべき、あ西政の震災の
方うまいく偉とあつた故ひるも思へ、不自由もも不便
なる言法と絶
何れ頼ることもこのあと人力を頼るあるべき無いか、大いに機械を

の文依頼して蘭印されたる人力もこゝの原始時代に戻りたるの感、
既用を見れば、即ち何人も生存するき出しに、何人も学動者は海
海を渡れば、何人も大工となる元のとなり左官となりこ
この人力の今日に於ける係られ[illegible]ことの如
何ても感[illegible]たずのハぬらんぬ
営々たる大帝都も四元の武蔵野の原となりて、満目荒涼び
出のすべく[illegible]なも無い、或十年の榮華を夢[illegible]となり
此、日本の政治の[illegible]開に参加し、帝都を[illegible]び[illegible]大敗を
取つたりもこんなどのことを無つたびあるう、内に天
革命の起つたりもこんなどのことを無つたびあるう、
震火を人の階級と用捨も[illegible]斟酌もなく、皇族も[illegible]壊の
此皇族も[illegible]死された、[illegible]百姓者も[illegible]なりとなつた、

電燈掛け家も今を燭燈を點するの四時代に戻つた、その
燃燈もなり缺乏を告げて、暗黒裡に[illegible]を[illegible]
す[illegible]燈[illegible]なれば、[illegible]を[illegible]角も家の梵ちけ殘つたあ
面の不自由此が、一物も身につけず僅に家を失つた方面
を見ると財産家も貧民も全く境遇を同ふし、佛家の所
謂る淨保されたる、一切空になる、無差別なる平等び
ある

コンナ大変に際して、の利那の感ずる、生るも畜きるも、死さへ
発うるれば、何物も惜しむる迄なと一切の愛憎うるるな
る、此の利那の人間の本然を隠蔽する露骨のあるつす
ものであるる、減る此の利那の感観念を以つて再後の一身を
愛し此れ、福を切て福を軽するれなるこう、拙家の教や

宗教の訓を較べて、震災の教訓が、所謂誘導（ゆうどう）に有効であらう、これは昔さを忘れるとて一身死を免えて居ると、焼け出家や財産を失ひ、焼失を免れた家や財産を焼き出すとすると、焼失を免れた家や財産を焼き出すとすると、日を経て後ひ徳を追ひ追回復し来る、初めは露命さえつなぎ得んべ、どんな下等な衣服ひも、飲ひも住ひも構はんと云つたものが、段々と不満を感じて回態うと来る、これらの人情ひ、此の人情を或る意味に於て復興の原動力となるものひとあるが、人間を強ふる現金であるとの説ひ出もこんこう起るのである

もう設金は一時うもあるも本体を戻らしめたのも一種の教訓ひある、世態の辛酸を

未だ知らぬ荒い（達）を教訓とつたのもみたりとく、世の時の成功者（達）も大なる教訓（狂験）を自覚する者（達）を自覚する教訓とつたことを疑ひ無い、地震を元来無情のものひあるけれども、これを感覚し之れを畏怖する人間ひ多く、動物ひある此の大災を受けり人間ひ多く、自の滅ぶるものを救んと申合せ、此の災禍を回復を敬虔の一種の天譴ひ考へるまいのと、彷徨の折る迷信ひおのつから起るとのて、迷信を愚なるものあるが、意味のあるものもある、地震を天譴と為すとく如きも大いなる意味のある、四民の弱点があるけれども天譴の日として解する筆も無い、一体天の敬虔を醒を必要とする程の鉄鞭ひ天譴と解するのであらう、

日本は日清戦争の戦後も強利を得て改進の大義を唱
参加し、ますます土壌を拡張し、場所をえんとの
つて得るところ多く国威隆々として揚り、一種威望を
為す状態の時の猶如の所を見て、幸とも
云へべきものあり、彩る幸運と切つても切れぬ
風を馴致し、真面目と云へ義会を新野をもつて、迫れつつ
フワと日を送るの外見ることを文化を進めることの出来
ものを特徴の方面を真に真面目へべきこの為すべ、譲為を
感生せしめるこの政府といはず社会といはず元ち満ちて、
こうしてもこうしても不満足あるを覚えしめるこの為の大
騒を為すのみ、しかるに、革命の地のみても援をまんば蓋し不
思議思いしめるこの震前の国情をもし、えの即ち

何人も震災を天譴と感せしめざるべからざるの所以であつて、何人も天を恨み
ず怨まず、[illegible]事の当然且必至のこの来れる極の感
するのを此の故であるべきのみ、
改造戦後改造の語を改造の到達の間に唱道されし、世界未曾
有の戦争の惨禍を受け、国情も戦前と異つて来れる為めに
国家并に社会万般のものを改造を要する譯也、彼等
の人力を以つて改造を行いんとし又行ひつつあるが、日本は口真
似をして同じく改造を呼ばつたが、事実改造も出来ず時
事日一日より非ず、到底西洋流のことく国民の自覚で改
造することを成就するこの実態の様の見へるが、此の
天災を人力の不甲斐ないのを嘲つて猛烈に迫つて来て、何
れとも容赦なく破壊しきつて、改造は義の由義を

いことのあるは人為で出来ないことを大自然の代つてやつタ
事に親かあるのけだと云ふ趣がある、
今度の地震火事は実に大事を思ひ切つた天祖災で犠牲の大なることを
千古未曾有であるが斯る奇変で罹災者の憂苦つた即時救ふ
わるくるの、這度大規模の災害も軍隊も依頼するを待たず自
然の間を要し蓋も軍隊も依頼するを待たず自
らう自らのを為すべきことを教訓した、
即ち自衛自治の必要をしみじみと感じもしめた、自
らの力の足らざる所は隣保と共同するより外は無いこ
と隣保団結の要を明瞭に教へた、自然の国を奬
もあるけれどもあの場合こんな無ければ如何な危険でどんな
な災害を助長せしめたであらうか、戦争と較べる程の

惨禍の巷なる教訓と云ふ言葉もあるが、あのあるる人々も
饑餓を凌げば上乗でもある、間易生活をある階級に
とのみ此の災難ひある、地震に饑饉や疫病や電信や電
話などの無用の設備ひも無用をなすことや、石造や
煉化の建物ひも霊柔本位ひし性に体裁のみを美すし、地
基礎なる其他実質の上に手を省いたことも木造家
屋ども地震災に拙くぬことも必ずしも祖的さんに都市
の為一の場合の如き難所を欠き、さんの如きアタフタ人命を
殺しに惨なる教訓もこれを伝つて得に、貴重の資
器も脆弱なる倉庫に蔵する危険や自爆の憂あ
る或る種の者を蔵する附近に回番銀行などを置くの
ることも大国方銀焚出するより驚さんに機械為

然る人力を閑却し軽侮しいざとなる其の閑却されし軽侮されし人力を却て大切なることを教へ、機械の文化教訓するの非も教訓されし、ヲヒヒアリズムの繁文褥礼が此のドサクサの場合事を滞滞の導き、醜状愚態を暴露したことも勿論大なる教訓である、数く来れば際限もなくあるまくて此等を以て始めて震災の教を待て始めていることひとつのみならず、我邦人も甚だ実験に乏しい教くこれ等の神経鈍性の神経を有するから莫大の代償を払ふことはなれのである

中央集権の一現象として帝都に人口の増加する、これ等の問題に於ても回顧ひあるか、我邦近来の傾向を農民の都会奢侈と

なりて第年田園に労働する者の激増したる又婦人の職業を得んと欲して都に集まることの盛んなる殖えて来たこれを一面に見ると地方の労働力を減じ地方を虚弱に導くものである、又都会に於ける人間の殖えるこの物価を昂騰せしめ種々の混雑を惹き起すことなれば決して慶ぶべきことにあらざるのみ、近来の熱を帯びて別居制すべからざるものあるは心あるこれを憂いとする所のものである然るに其の勢に乗じ今日の震災を一挙強人と全都を焦土に帰したる結果、六七十万人を地方へ放ちあることを由義なくし、又十万以上の人口を死亡に以て減じ一方に、これ等不幸のうちに、天の神の神助ともいふべく、地方人も此の災禍に鑑み都会の危険なることを深く思を

きりこゝゝ迄を入る間べこうさゝることを同意するゝゝは、
こんも震災こゝろ得ゝ一大教訓とも申し津ぶし云ひ
得るべきあらう
然れん帝都を復興すべきやゝ新たに地の震災が教くべきことを出が云
ひ多いどうも全滅となつて新たなる道ゝ拓かるゝことゝなつて
いまを復舊ひさく、或る年未来のうえ理想的の計畫を
要する、一世紀こ一切びを免うん難い同し災害うゝ起ひ来ら
ゝ今日復興ゝ拓くゝ拓しるければ、祖を拓しも福となる
すゝあひとゝ、今日の天災を大なる教訓ゝのが永
久の設備をすることゝ得難い好機会と云べきか
あゝ英京倫敦のごとき世界こ一二を争ひ大都ひゝあるゝ
永久の建設物ゝ市街の形勢を定めて

どうすることも出来ないので、市中と電車を止ることも出来
ず、今日の不便と云ふんであるゝ、東京と横浜京橋間を橋を
かけるの要を免うんとしたら、まさこうゝ言の建物を潰
すゝ申すもうゝうゝ比べあらう、諸々廳舍学校
国法殿の如き目貫の地區ゝ焦土ゝなりつつ
以上ゝ、どんな現起的注意書ゝなるゝことゝなる、
ゝんゝ世界の大都市の傷ゝあるを立ち坊げ
ハゝかゝ、ナンとゝも此の震災ゝ教くんことを
健とゝなるければ、他の国一災害の起つた時又ゝ逆鱗
の悔を繰ゝるゝあらう、今日の経験ゝ力も不便を
感じたのゝ震災ゝ火災ゝ免れ得ないのであるの
同時ゝ清火用ゝ役立ちつつことゝある、今後

ハ水道ニ大ニ震災ヲ防ク為メ設備ヲ施シ
セザルベカラザルモノ、市中ニ維持ノ溝渠ヲ設ケ、消火
ノ用ニ供スルヲモ一ツノ為メ及ビ街ラウ、電線電信線
道電車、地等ニ空中ノ軍器ニ備ヘル今後ノ
問題研究スル所ノモノ地下ニ設備ヲ為サザル
バカラザルモノ、倉庫ニ石ヲ用ヒ煉化ヲ充ンと震火ノ災
ヲ免ルルニアラザルモノ、殊ニ義ヲ頼みとスルニ多ク
ノ貴重品ヲ失フニ至ルベキ、恐ラクハ今後貴重の資
什ヲ蔵スルニ市ヲ富ム地下室ヲ設ケラ
ルンとスル傾向アル煉化、瓦ノ石ノ墻壁ハ一ト溜リモナク
将基作シとなってみる、防火壁のことも又同し果合
ノ出会ってみる、地等ノ如キ経験ニ徴シテ火山四

和市ノ工風ヲ為サザルベカラザルモノ、建築のことも尤も
顧慮ニ値スル震生ニ拘ラズ試験されに下
々層ニ比シ上ノ方ニ於ンとスルガ耐震ニ大ニよい
様ニあるが、形式の大なるものも地盤ニ力をこめることも尤
も肝要である、横浜ハ震災ニ成ル事実ニ強ウ
けんとも、その地盤ニ変ンとナッテ居ると云ふ説もある、
三尺ひうち下を変換を以て埋めれば、[illegible]業場ノ
ヨウ落潮のものであるから一震倒壊将基作しの様
を見たのである、三菱の○丸の西経堂の建築物ノ
ヨウ無事ニ済ンだのも地盤を勿論一切のものが堅実
ニ行ってゐるからである、按ずるに自家経営の善治
ニ受負業者ノ善治ひとしく浅草の十二階のごとき

下潮のもちさそうな言葉の中に折れたのも
明治廿四年頃西洋建築こそ基礎工事をもとに
うるさいある浅草の浅草の埋立地こそよい可成な基
礎工事であったら、地震を待たず、弐年も前に崩
壊したのだあらう、堂宇の多く災を免れたのも一つは
真面目な建築さん手うぬいでないうちであらう人勿論
本国有の寺社の建造法も地震に耐くる工風もあるこうでもある、
今家屋等々々兄へとまくの煉化石造の西洋家屋を作れと
のを見て、西洋家屋を地震に倒しないとは言へぬものある
故に、必ずしも西洋式の罪ばかりとは言へぬ、安い家屋を欲しの
らばある、多くの焚物の建物を見ると受負の安い不正直な
あるうを赤保さの白状しとある、丸義出版や東京名所の

あの残骸の醜状を取りも直さず受負者の醜を告白するものに
あるまいか、兎角日本の文化は未だ地下に及んでゐるのに、目に見え
さる處に多くの費を投ずるを惜しむの氣味うあり、電車電
線の地下に設けらるさるも亦文化の地下に及ぶさる一例である火山
国に於てしも地下を開発するを危険の最も大なるものに今
後の経営を重きを地下に置くべきである地下室に多く
の費を投ずることを大切[illegible]である、西洋人の市街建
築に急いことを終に被服廠の焼るを惹き起したのも彼
本所方面に於て廣闊の後地を地埋めしもあるこそ、之れも
西洋の流に倣ひたるも無理なるこそあらうと
西洋人の如く保険[illegible]八[illegible]地をあらうと
のもある、今後各区ともに大なる西洋人の色眼鏡を掛ける
[illegible]

ゑ、そんな公園、平時に公園として興業の変とした位のことが如斯地震を誘致することを今度の場合ではじめて利益出来ぬ、邦人もこれら公園を教科視し比観の為に今度の震火より始めて其の必要を感じたであらう、高速度の多くの橋梁道路が狭うつとことや、火災保険が震災に対し何等の責任の無いことや挙げ来れば、今度の実験で改善を要することは枚挙に暇がない、自分の理想的都市の復興はと云へば其の方案は別にゆづるとしても此の震火の惨害に鑑みて他の悔のない様に設計を改めねばならぬことを主張する

今度の災害の文化に与つたことも非常のものがある、新たに

図書を多数に全滅と云ふ程である、幸に図書館としては帝国図書館は早大図書館慶應義塾図書館は既に焼失、モリソン文庫などは無事を得たけれども帝都に多くの貴重の図書を蔵してゐる帝国図書館の図書は殆んど大部分の蔵書家の図書は焼け、数多の貴重図書といふものは右の三四の図書館の外いくらもある書籍を除いては焼く焼け、各公私の学校の図書も悉く喪失し、印刷所も多数の印刷所も焼け、新聞社も四五を除くの外二三の印刷会社を除くの外山の手にある印刷会社も焼け、紙型も焼け、印刷機も焼け、中小の教科書も真に泰火以上である、こんな都市を改造し人心を新にする図書を一炬に附するのもよいかも知れぬ、近年多きを誇

へさる清廉の文学者たちを一掃を窓ろ快とするけれども、刹
唐二度と手を入れて文物を移す、光寒の図書殊に稀覯の図書
を失つたことも取り返しのつかぬ大損害と文化のため
の浩歎せざるを得ぬ
図書に次ぐの大損失を書画其他の美術品である、書画
の類を名品を人の私蔵に帰し、国宝のごとき堅牢の
所に保護されておらぬ、別に近年諸侯の珍花が其
の手を離れ、富豪の私蔵に帰したものの少きにあらず、
諸侯の手にあつたものの多くは、
が、舊幕地に分置して居るとはいえども、
が、此の一挙に皆悉く失ひ去れば（略）
の手に移りたる無きにあらざるも）勿論舊諸侯の手

にあつたものであるから、其の散失に失せたものも多くあらう、
私行主義地長官の書画を見楽し、迷
惑するあるべきも、價に積つたら恐らく二三万円のものは
あらうが、移り切つた新生の美術品の如きは焼けたので二三万円し
かあらず、外国人で焼亡したと聞く時は美術の為に嘆歎
しないが、これを単に一例として見る一例に過ぎず、仔細に取調べたらこの
災禍で天下の名物がいくら亡びたか、なかなか莫大なものであ
らう、古来唯一のものが永久に亡びるのであるから、実に惜しむ
べき次第である、
自分等は常々主張もし実践もしたことは、天下の名品を可成
帝室の御物に移すべき義にして宜きに従いたることであつた、
購ひ得る様にさるべきこと、設令倍の高くとも美術の為

の帝室博物館で購ふ事もあるべきであるが、寄附者の出捐を以てドシ〳〵名器を蒐集することを無く又私義に属する名書や名品を可成博物館に預ること第一の危難を防ぐ一策である、そんなのみならず、アタラ多くの天下の名器を私人の私蔵に委しておく結果が今日のごとく一朝変亡に帰したる、惜物狂うの其使命を理解し博物館に保護を委ねるとは、コンナ事も無つたであらうに、今日十日の菊、平和の戦争に於ては、惟だ此の教訓をこそ守るべきものである、天下の名器を設会して一家の私蔵に属するとしても世界をして之れを保護することを忘れてはならぬ、

自分の事もまた云ふまでもなく家をうる近年荒れた

国書が七八千部もあり、書籍も三百幅位もあるが、書籍も惜しいものだとは[redacted]が国書は相当に稀覯のものである、若しあの除災大災に罹つたとすれば、それは必ずや幸と利益とするに公益の為なる惜しくなつた、現代の国書の類もこんなに追々復刊されるが、自分の蔵書は皆家古版部類で震前でさへ容易に手を入れぬ者が十の七八を占めてゐるそれ新刊の国書は決して不足とせず、自分のものもまた確に稀覯のものもなつた、国家の助うるものは社会であるが、物騒の世の中なる油断もできぬ、放棄もあつて類模を作つても馬鹿々々しいと思つたが、サアニ冊若もある也物をどこへ預け物もない、出版部の義も早大

の出庫も充満して居るので迚も預り切れないとのことで、傾いた家を起すのみならず是非こんを取除け方法のないとのことで、ひとまず命令大隅谷殿に預けることとしたが、今般の義も二個所共潰れたのを取り敢ず、四元義の方面に引き移すことにして、義塩とも保セし自動貨車三台に満載してヤットの事で送り出しました。ここに初めて安心した。夫候の出番が一時なりとも自分の方庫とすつたのも初めての因縁であるから感慨に堪へない。

今般の震災で自分の家と大破こと及び玄関うら一列に勝手口に取崩さねば傾いた母屋の起きあがるのを取拂つた結果、家うら玄関すぐうら、急作りのバラックで、物置を兼ねた勝手の入口を作り、潰れた浴場とそれに隣る物置をバラックで

作り、破れた塀を紙で張り、屋根の瓦の落ちたのを假りに使用致し、喝ふるアスファルト製の席の板をもつて雨露を凌ぐ丈けにて三十日もこれを修理を成つたが家の体裁をなさんとも罹災をどこ迄もあらはしてみる。ちうに火災と罹つたことは大の仕合と自祝せねばならぬ。但、各校方面の罹災者落ちて可なりの位置と信じ、玄関の方諸方面より見舞金をもらつた。結局、自分の仕合と家うち火災を免れたことは、自分の仕事に於ける拠所半以上面白の出来ないうち無無雖であつたことは、早大も創立に損害多く理工科の実用化学実験室と大海出を失つた損害を二十五万円以上であらう。その他煉化情塀の被害や土蔵の潰れたのとを計算したら十萬円位の

横矢を受けるものであらう、早大の出版部を幸に免れの為め屋の破れ比住で四家人とともに、印刷物を紙も受取ることの中に三階建の横う三階と二階丈潰れたるも比の格子の横宅、文明協会と文部省の洗礼を全く無難であつた、何のも文化機関である北斗が無難であつたのもひとり一身の為に祝する次第である、但し折角早大の経営した大隈侯紀念講堂の募金事業は折角の十数萬の寄附の申込を受けたるも、挫折の態なるは残念である、尚ほ同時期に協会も三十年紀念と題して三十萬の募金を計画したが、これも此の震災の為に挫折する情況にある由義なき仕合せである、

震後一家の修理に忙しいので早稲田の方面へハ二三度徒歩ひも

き合せや協会の二三度徒歩し法道民家破壊の状態を見たが、下町へ出うけてゐたのは二十日であつた、ヤット江戸川筋の電車が九段下まで通じ、神保町から呉服橋まで電車神田うの動いて居るので、北斗に撃つて日本橋銀座を日比谷あたりの実況を巡視して見たが、惨状を到る所の実況以上である、震後二十日も経た後であるから焼跡もいくらか整理されて居る様に相違ないが、僅かに道路を表きることを片付けた位で、廣汎に亡くなる焼跡の片付き様も無い、飯田橋を通ると飯田町一帯の左右も全く焦土に帰して家と目を遮ぎる家屋も一軒もない、唯だ残れた煙突と焼田原とのみで何の名所の立つて居るのみで何の名所の役立ちも無い、九段下も徒歩で神田

の前を行くと、こゝも見渡す限り焦土となつて唯に駱駝の上の破壊せんとするニコライの高塔を認むるのみなる地点
ハ図書館なる日課のごとく訪問に書庫もあり廻廊
の家も可なり浮出あるが、唯に焼跡さもしく立
つて居る立て札に、甲乙丙丁を認むるのみで、堆積の塵
灰が多くハ図書（僅かの）の亡きし骸と思ふと一歎を禁じ
得ざるなり。此神保町で電車と乗り、竹橋を通りたるとき
高科大学の丈が残骸を残してゐる、面白き限り
無きを得て、講堂も如形残もメチヤ〳〵になつてゐる、遠く出
て見ると石垣を根拠として前れとおり、大手町迄の多くの役
所と思ふまで云つて来たるくらい丈う残つてゐる、日本私の
と三井と流れと無書にてあつたり、帝劇ひ敵で祝祭

も助かるにあらざる一つも無い、呉服店こそ徒歩で日本橋
のあるを出ると、こゝを大高庭うまく煉瓦の搭をしたと
所だけは、残骸ものこるが建てゐるが修理の後
復舊の出来そうなるこゝろ
座も亦同様で、一種特有の
の感を持つ、業御無ない、内幸町まゝの高い区域を無
を得たりと三菱の建物丸の内ビルディング東京駅
のステーションその他二三大会社の建物
で、何ども無くなつて仕舞つてゐる、北茅石色や煉化造の建
物の焼失した跡を若人の如きものの光景で、残骸うなつて
ゐる丈は一層悲惨の感ドを強くする、若しを人尖
過へば皆な灰と化し去るのであるから跡片付と云ふ

既定位置にまで高の知れたるに比し、煉化の残骸を頭る仕末
う面倒で、之れを破壊し之れを片付けることも亦一大事業
うるに、十数年前に爆薬を用ひ爆薬にて破壊してみるに、
[illegible]二発目の爆薬にて半分も片つく
のと云ふ実際で、損害の上より更らに片付費用の方が
寡き為人の夢想せざる所、焼跡のバラックの出来所
もあるとか聞く為に、焼跡を責る所で、之れ甚だ多い
なくも無い。日比谷公園の西門の辺中に入って見ると、
雑居のなるべくいくらかバラック建の家を見受ける。
で園内に最も多くあることの為に公園の景観を損ずる
ばかり、北公園も廣くなったのが、北住のものでも谷又を後ろ
う義務で人家に離れてみるならば、本所の被服廠の跡を塔ハ

無ったであらうと公園を出でて
須田町まで乗合自動車に乗り、日本橋通りの前刻
経過した所を見ると須田町の交叉點でも車しかし
ことに無事であるのを廣瀬中佐の銅像のみで他を焼き尽くし
ていつこも同じ荒涼の景色であるを一来一巡の
ちに、廣瀬を別る處に高く揚る一種異様の奥築を築
を横ち鼻口を掩はざれば面を行う出来ぬ程不快のもの
であった、いまだ本所深川の浅草のひ谷方面へは出かけて見る
いの迂捨した所を以て想像するに推し測
らう、実に此等廣汎に亘る市街各區で家を失つ
たものを面為住ひのくもあるであらうが、そんなよくも
使りの宿不を得たとあるだと最も危く且つ不思議の様

感じしめたのは此一事にあつた、

大災後最も憂慮すべきものは市民の意氣の沮喪である、如何に復興の事があつても市民の意氣が沮喪して再起の力を失はぬ、幸ひに沮喪の極致に陥らずにすんだのは何らか政府も流れに乗じて、救護作興の臨機の処置を執り常住に拘泥せずして、一般国民も今度の震災を既に重大視してゐる、世界の列国も此事の国情を寄せてゐる、日本の財政状態は古今未曾有の好況の時であつた、復興の力も充分のが不幸中の幸で、日本第一の大都会が全滅して百億の財産を烏有に帰しても外国の日本公債は常時信用を保つてゐる、此等の氣運に乗じて市民が躍進す

が復興に期して待つべきで、方針さへ誤らなければ、震前より也堅實な大都会が起こる相違ない、戦争はもとより大破滅の後却つて復興に早い事の例は歴史上いくらもある、況んや国民の奮発心は此震災を機として一層の発揮を為すべき性質を有する、外人が災後の市民の態度を見て異敬するのも亦こゝに在る、

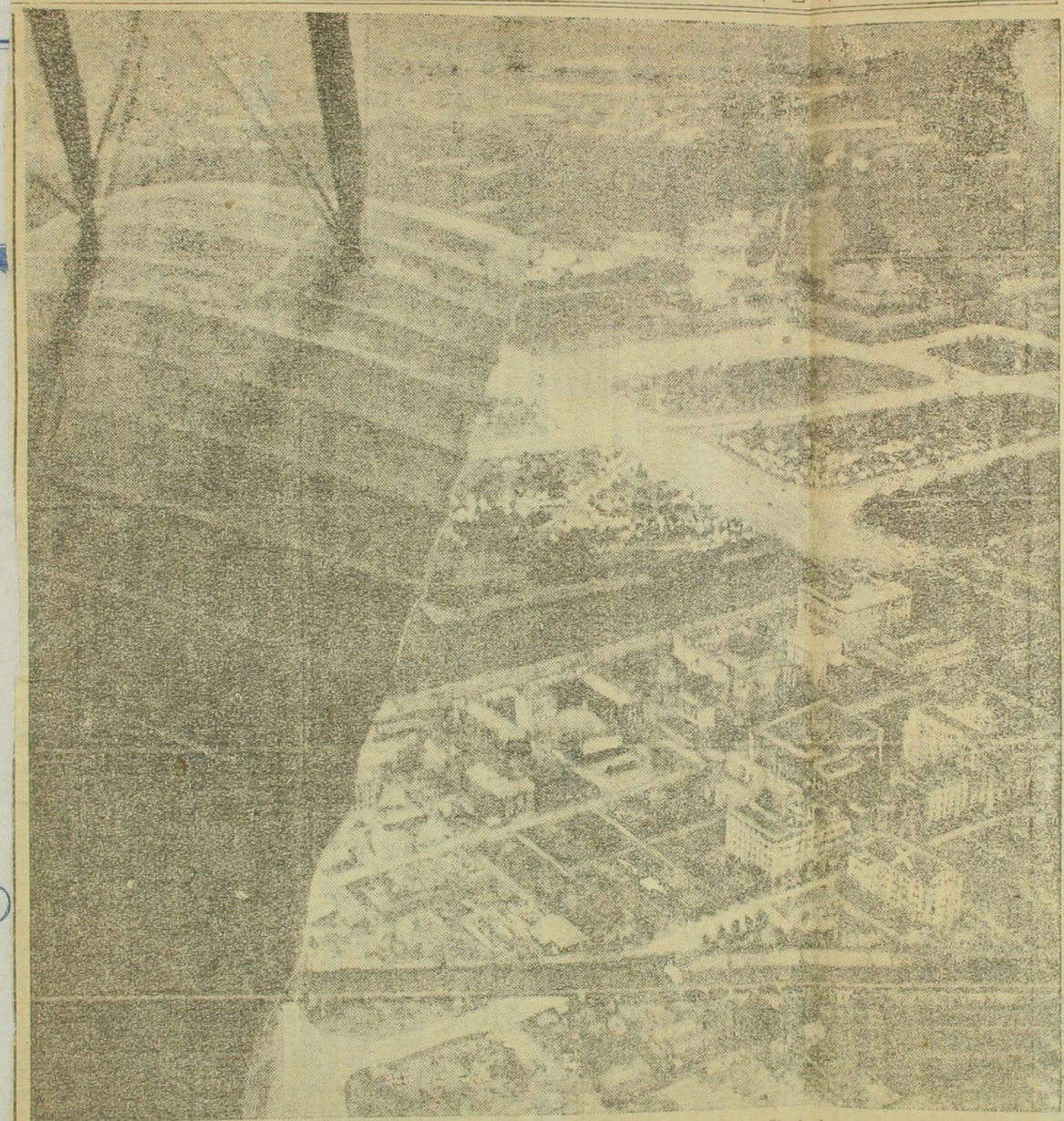
此が大呼刺激を受けて此事の奮発心を起すと共に四後の早いのは此震災の後の驚倒の打撃を受けたことを見れば諦らめつゝ起ち上がる世界の例は日本国民は大打撃で人心が一新すれば、初うして福と変ずる所に偉大なる日本国民のこゝに此の大禍で沮喪せざる所に偉大なる価値がある、諸外人が災後の市民の態度を視て異敬するといふも蓋し偶然でない、

大震の後まだ幾分餘震のしまぬうちと並てやゝ伝えたが、
濃尾の震災を東京ひとれるど餘震を感じうつれ、自分の経
験で長く餘震を感ずるのを今回が初めてである、初震以来改
三千数百回の餘震こうあつたと氣象雲ひき報告してゐ
る、現に三十六回も経験したが高餘震がしまぬ、然るに
強い餘震もある、遠ざかる程である、震源地の整理
北の餘震と光星のあひだと理窟は別つてみても矢張り強よ
いうまを感ずるものもある、学者者もの言ふことを完全信用が置
き難いものである、コンナ震災の実験を追と地震学も進
又前知も出来る様なるこも知れんがまだそこまでは進んでゐ
ない、餘震と思つて安心してゐたら、それが初震よりも強い様な
ことも無いとも限らぬと地震学者の力量を疑い出すと餘

震の強弱ひとある毎に不安の念が起る、何れにしても四十日も餘震
のしまぬのを以て今度の地震の並大体のものでないことを
ミジンと感じた

大正十二年十月七日手録

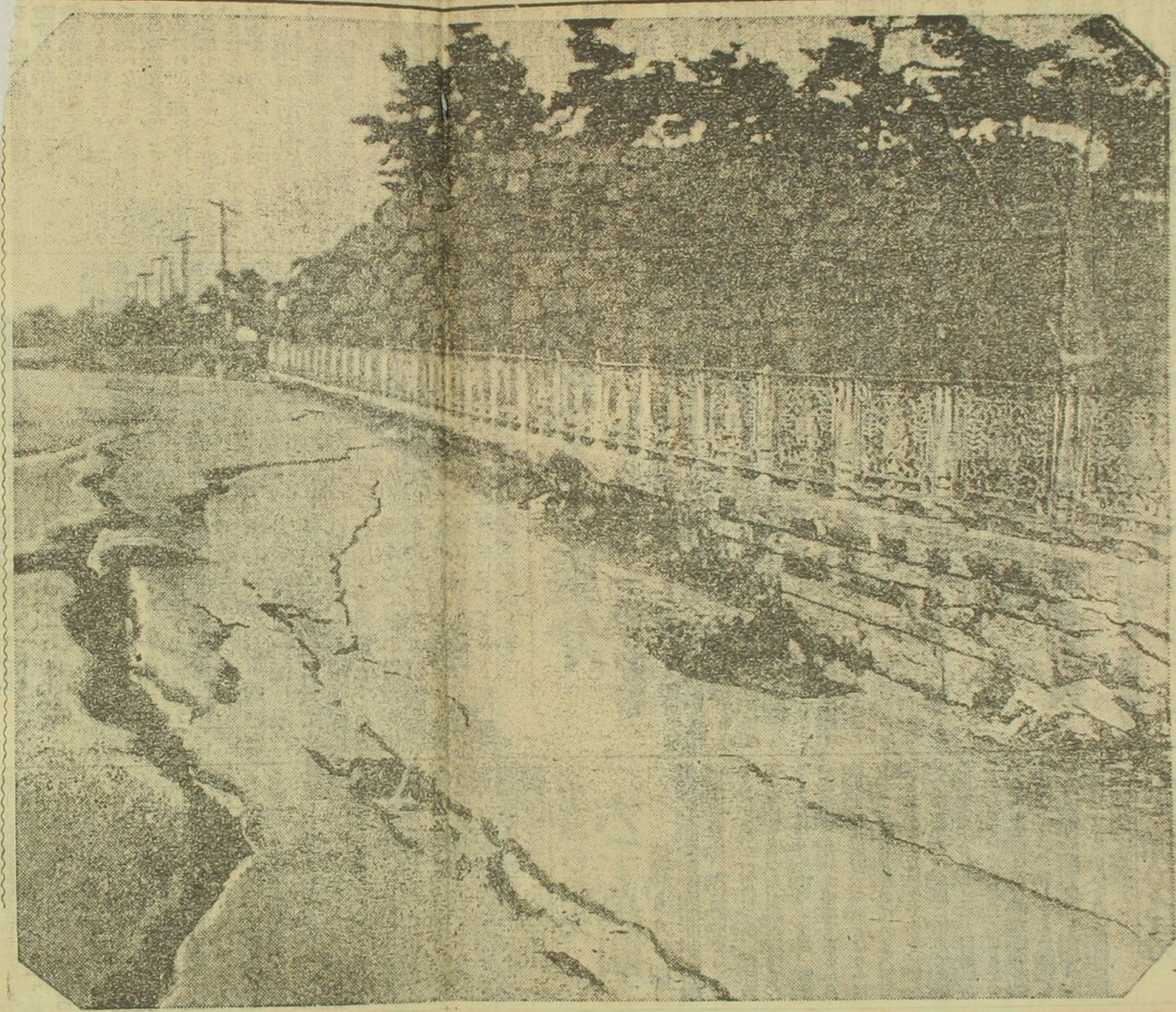
珍らしを求めんがいろ〳〵あるがこゝらを不感の大事を保
して居る業を閑く、
震後数行の新聞紙に惨状をうつしと国の西一二こし
を収めて紀念とする



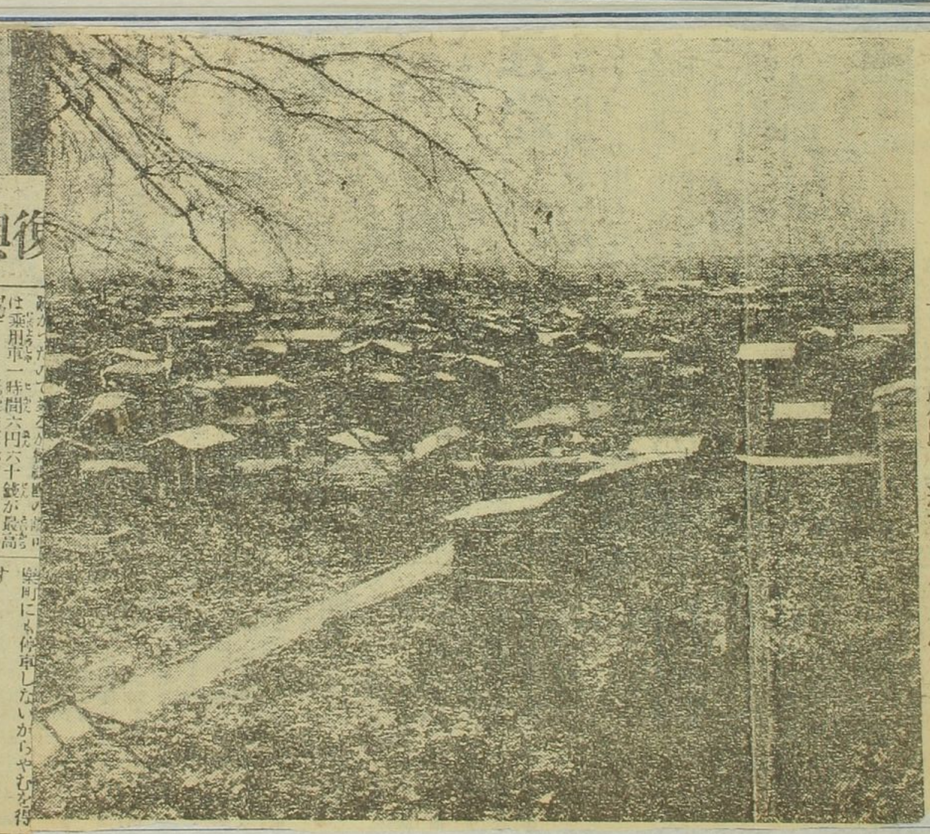
飛行機上から見た丸の内

（社本は印×）

我社小椋寫眞班員がきのふ片岡機に（立川から）乘つて



大地の龜裂——宮城前がいせん道路



新神田市街

早くも焼跡に数萬戸のバラック

復興審議会顔寄せ

夜明しして職を待つ

は乗用車一時間六円六十錢が最高限度とされ貨物自動車は一哩一貫一錢を限度として許可されてゐると聞いてはソノ藪縮の自動車賃は暴利の横綱であるにも拘らず暴利取締を適用されない事になつてゐるからトクンで三割の利益を占め檢挙される世の中にこれはまた三倍四倍の料金が默認されるなど矛盾も甚だしく右の規定料金以上を

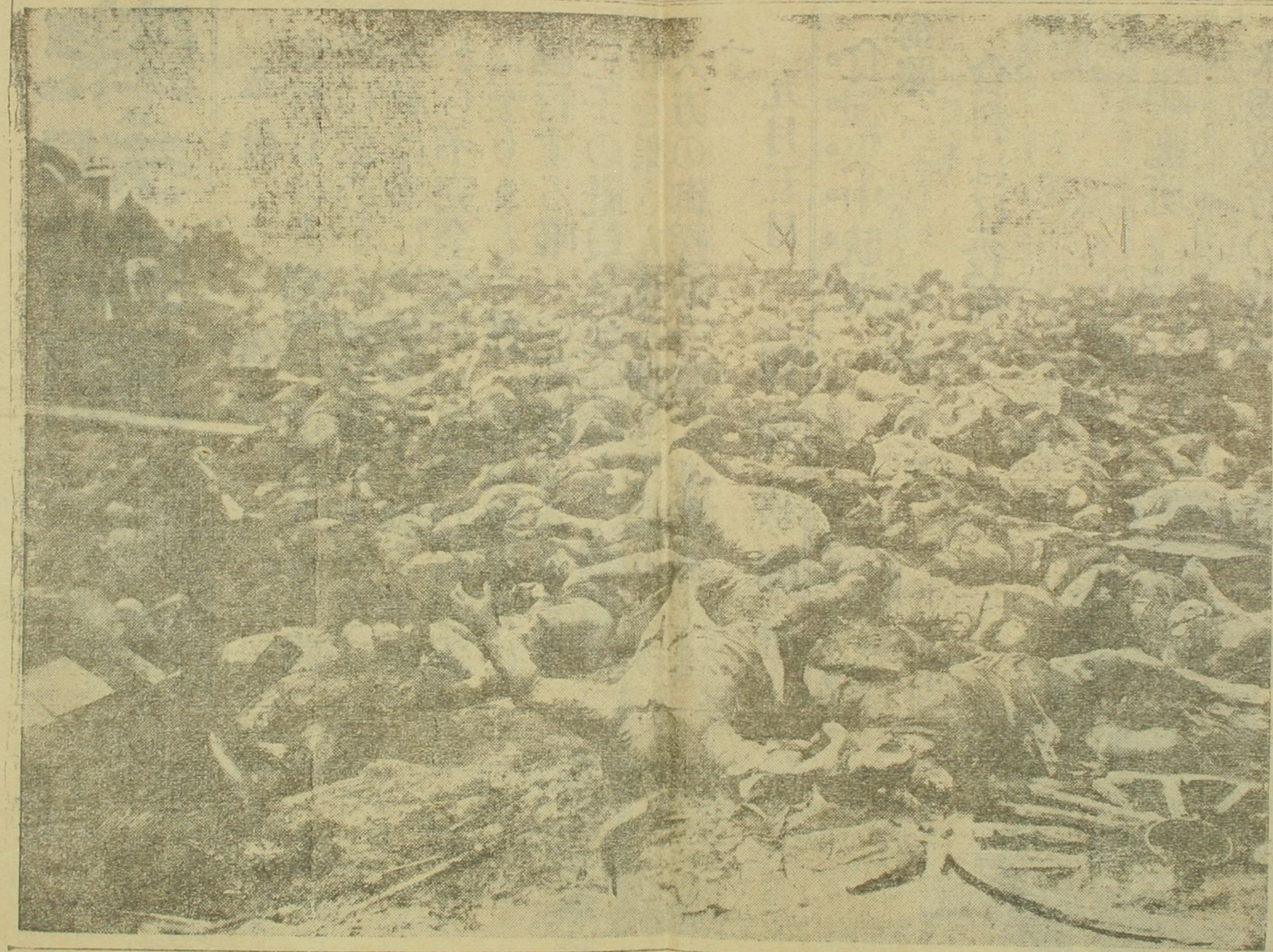
乗用車にも停車しないからやむを得ず

東京駅まで

来たところが札口で咎められ六錢とられた新橋で降りる事ができないから東京まで来たのにまるでごまかしでもしたやうに賃金をとるのは不都合だ といつたやうな苦情を持ち込む人々が非常に多いこれに対して当局では『たとへば蒲田から新橋までの定期券を持つた人が東京

新神田市街

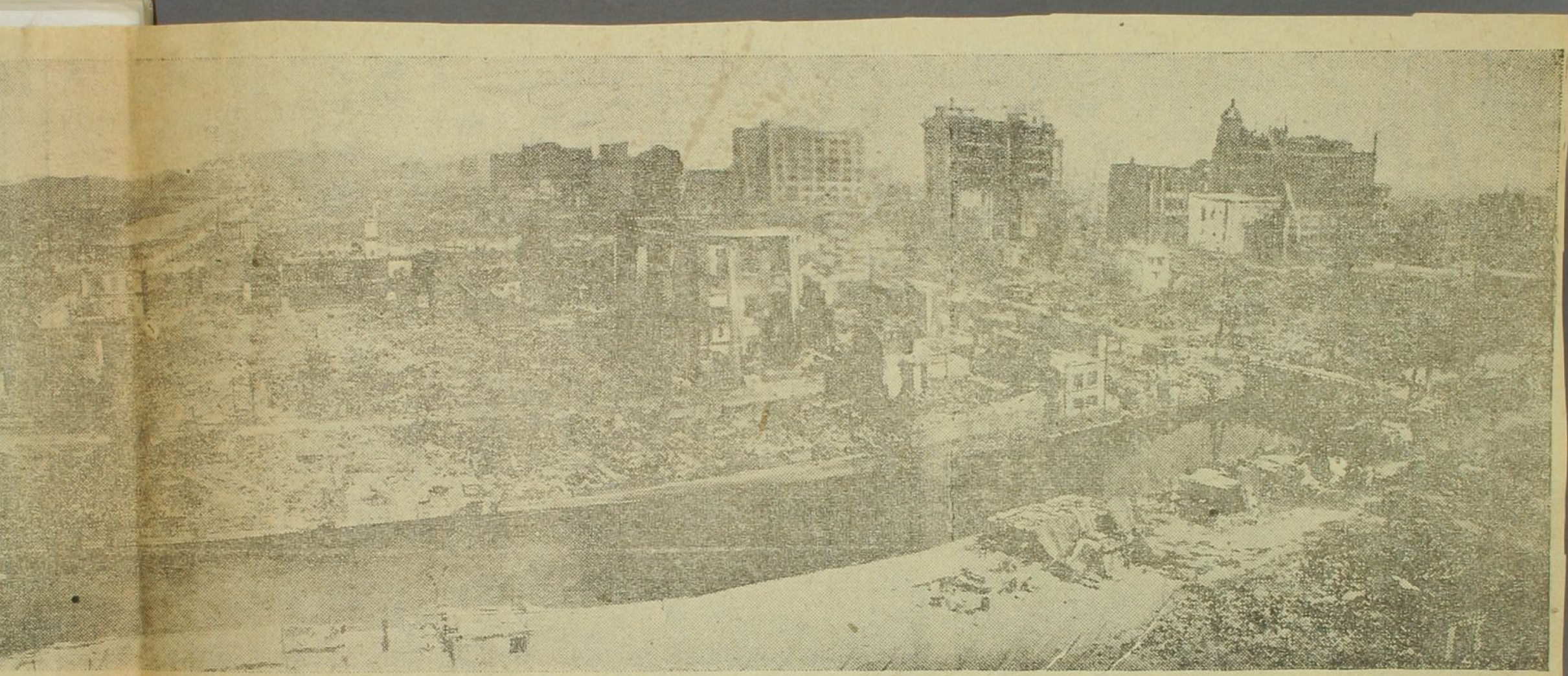
早くも燒跡に數萬戸のバラック



あゝ凄慘！本所被服廠跡の屍體の山

城宮の朝日

場廣前



京橋より日本橋を望む

山と積まれた白骨

悲惨な話！　思ふだに恐ろしい！　獣性の然自な惨殺の火災震災の生存者が悲哀の話を語る白骨の山に積まれた遺族の跡を訪ねて服装の所持品を捜しあぐねて涙ぐむ遺族の姿はあのほしい獣性の然自な的なものを誰れ種の涙でなつかしい（寫眞中央の花の向ふは周圍のそ山の骨白高さ立て標を立て遺族の人々）

以下全て
白紙